
ようこそ華の麗香女学院へ～俺を待つのは天国か地獄か

真埼 紳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこそ華の麗香女学院へ～俺を待つのは天国か地獄か

【NNコード】

N1753X

【作者名】

真崎 紳

【あらすじ】

女性恐怖症である綾辻千尋が、それを克服すべく、いとこが経営する女学院へと、女子生徒として入学する。

女子だけの学園の中で、千尋は男だとバレずに学院生活を続ける事ができるのか？ そして女性恐怖症は克服できるのか？

個性豊かなキャラたちが織りなすドタバタ学園コメディです。

「俺は女だ……人が聞いたら突然何を言い出すのかと思うかもしれないし、こいつ頭がおかしいのか？ と思うかもしれない。だが、俺はすこぶる正常だ。別に心が崩壊した訳ではないし、俺にはそんな趣味はない。さっきの言葉が矛盾しているのは自分でもちゃんと分かっている。だが俺は女としてここにいなければならぬのだ。なぜならここは……」

職員室を出て教室へと向かう。授業が始まっているからだろうか、廊下はひつそりと静まり返っていた。

「あ、あの……大丈夫、綾辻くん……あつ、じゃなかつた、綾辻さん。ちょっと顔色が悪いけど……」

横にいた気の弱そうな女教師が話しかけてくる。黒縁のメガネの奥からオレを心配そうに見つめている。彼女の言うとおり、俺は今、気分が悪い。そりやあ悪くなるだろう。だって、女の格好をして実際に女学院の生徒としてこれから生活をしていかなければならぬのだから……。原因は全て『あの女』にあるんだ……あいつが俺の人生を……。

幼い頃の記憶が脳裏をよぎる。俺の従兄弟であり、今はこの女学院の理事長である『広小路麗菜』による、思い出すのも忌々しい、あんなことやこんな出来事が頭の中を全力で駆け巡っている。

「綾辻さん、本当に大丈夫？」

担任である彼女、『春日由里絵』が突然俺の背中に手を触れた。

刹那、背中に悪寒が走ると同時に、身体が勝手に痙攣し始めた。

「や、や、や、触らないでって言つたじゃないですか！ お、俺はじょ、じょ女性恐怖症だつて説明したでしょ！」

思わず普段の言葉が出てしまつ。次の瞬間、脳天に激しい痛みが走つた。

突然襲われた痛みに田の前にはチカチカと星が飛んでいる。後ろを振り向くと、そこには、俺の天敵であるこの学園の理事長、広小路麗菜の姿があつた。

腰の辺りまである、金髪とまではいかないが明るい色の巻き髪。ぱつぱつとした一重まぶたの田と整つた顔立ち。淡い紅色に彩られた脣は濡れたようにツヤツヤと輝いている。色白で透き通るような肌には何の欠点もない。まるでフランス人形のような可愛らしい顔をした女。これが俺のいとこである麗菜なのだ。

麗菜は金属バッジを床に着き、グリップに両手を置きながら「！」を見るような目で俺を見下ろしていた。

「千尋……あれほど気をつけると言つたではないか。誰もいなかつたからよかつたものの……正体がバレて困るのはお前自身なのだぞ。もしもこの学園の女子生徒にお前の素性がバレたら、あんなことを……いや、それだけでは済まんな。あんなところやこんなところ……」

「……」

麗菜は卑屈な笑みを浮かべながら耳元で囁いたあと、俺の頬に軽くキスをした。

全身に一気に鳥肌が立つ。次の瞬間、身体が硬直した。俺はそのまま廊下に倒れ込んだ。その拍子に硬直が解けたかと思つと、殺虫剤をかけられたあの「ゴキブリ」ことへ、手足を痙攣させながらもがき苦しんだ。

「きやあっ！ 綾辻さん、大丈夫！？」

慌てて俺に駆け寄る春日先生。それとは対照的に、麗菜は、金属バッジに両手を置いたまま、相変わらず俺を見下ろしている。

「大丈夫だ千尋……言葉遣いさえ氣をつければ、今のお前はどこから見ても女子だ……女のような容姿に生んでくれた親に礼を言つんだな。さてと、私はもう行く。お前に付き合つてているほど、理事長は暇ではないのでな」

金属バッジを左肩に乗せて歩いている姿はさながらジャイアンである。麗菜はそのまま理事長室へと姿を消した。俺は不屈の闘志で立ち上がると、近くにあつたお手洗いへと立ち寄つた。綺麗に掃除された手洗い場にある鏡を見つめる。そこには「」の女学院の制服に身を包む、栗色のサラサラヘアの美少女が映し出されていた。

2へ続く……

ぱつちつとした瞳は、いとこである麗菜によく似ている。色白な
ところもそちらの家系のものを受け継いだのだらう。それにしても
最近のウイッグはよくできているものだ。激しい動きの後でも、ず
れてしまつとははないのだから……。

俺はこの変装に不備がないかをもう一度チェックしながら、あの
時のことを探し出していた。

一週間前の「」と……

「ああそっだ。いすれは女学院のひとつを千尋に任せようと思つて
いる。だが……」

うちの屋敷に来ていた麗菜。親父の書斎に入つたままなかなか出
てこない。もしかして中で何かエッチなことでもしているのかと思つ
て、そり聞き耳を立てていた。

ちなみに俺は女性恐怖症だが、女に興味がないわけではない。あ
の柔らかで丸みのある膨らみを触つてみたいという願望は普通の男
子並にあるのだ。だが俺の体质がそれを邪魔して……。

「おじさまのお気持ち、お察しいたします。千尋があんな性癖をも

つて生まれてしまつたことで、おじれおも粗鄙おぬま』……』

「性癖じやねえよつー。元はと並べばお前のせこだらうがつー。」

麗菜の暴言に思わず書齋の扉を勢いよく開く。

「十尋……全くお前とこつ奴は。人の話を盗み聞きするとは。おとかお前、私がおじをまとエッチなことでもしてこるんじやないかと思つたのではないだらうな。」

「ば、ばか、そんな訳ねえだらう。それよりもわざの薬葉、撤回しぐ」

「何の話だ?」

「性癖の」とだ性癖のー。」

「ああ、そのことか。私は事実を述べたまでだ」

「あれは性癖じやねえつー。俺がまだ幼い時に、お前が俺にあんなことやこんなことやそんなことまでしたから、俺は女性に對して恐怖心を抱くよつになつたんだ。俺は被害者だつー。責任をとれ、責任をー。」

「男のクセにギャアギャアうるさい奴だ。今日はそのことでおじさまと話合つにきたのだ。お前はいづれ、文学院のひとつを任せられる」とになる。理事長が『ひひ』では笑い話にもならん。

麗菜は左の頬に、右手の甲をくつつけながら言った。

「やつひじやねえ！ 僕は女が怖いだけで女には興味がある」

「興味があつても身体がこれでは交わることもできまー」

そう言つと、麗菜は俺の手を取り、細身の身体には不釣り合にな膨らみに触れた。

「あやあああああー！」

俺の頭の中に幼い頃経験した、あんなことやこんなことやそんなことが走馬燈のように駆け巡る。背中に悪寒が走つたと同時に、恐怖で身体がブルブルと痙攣しあじめた。

「おじさま、見ての通りです。こんなことではおじさまの心が安まる時がありますわ。どうでしょ？ ここせひひとつ、私に任せてしま頂けないでしょ？ 獅子は千尋の谷に我が子を突き落とすということがあります。ここせひひとつ、千尋の女性恐怖症を治すために、我が女学院に編入させようと考えてます」

「へ？」「？」

「どうこうこと？」「麗菜のその言葉の意味が分からなかつた。

「言葉の通りだ。お前を女の園で生活させる。要は慣れだ。女に囲まれて生活すれば、まあとお前の恐怖症は治るところだ」

「何言つやつてんの？ 僕は男だぜ。女学院に編入できるわけないじやん」

「大丈夫だ。問題ない」

「いやいやいやいやいやいやいやいや、問題だらけでしょ」

「バレなければいいのだ」

「バレるつて、絶対バレるつて！」

「四の五の言つて。もうお前を迎える準備は進んでいる。あとおじさまの許可を頂くだけだ」

「許可つて……そんなこと許可する訳ねえじゃん。だつて、女子校に男が通うんだぜ。バレたらただじゃ済まねえだろつ」

「おじさまへ、どうでしょうか？」

「うむ。許可ある」

「ええええええええええええええええええつて！」

……と云つたので、俺は女性恐怖症を治すために、麗菜が理事長をつとめる、この『麗香女学院』へとやつてきたのだ。

これから俺は、この女学院にある寮で生活をしながら学院で学ぶことになった。

洗面所の鏡で全身をチックし、やけを出る。担任の春日先生が

心配そうな目で俺を見ていた。

「大丈夫?」

「ええ、大丈夫です」

女の子口調で答える俺。麗菜が言つた通り、女装した俺の姿はどこからどう見ても女の子だ。あとは言葉使いに気をつけるだけだつた。

「それじゃあ、行きましょうか?」

「はい」

二人で教室へ向かつて歩き始めた時だつた。

「春日先生!」

突然、後ろから声がした。一人で同時に振り向く。そこには、にこやかな顔でこちらを見ている、黒髪の美少女の姿があつた。

3へ続く……

「あら加納さん、こんなところをしているの？」

担任である由里絵先生が、そこに立っている黒髪の美少女に話しかけた。

背中あたりまで伸ばしたサラサラの髪は、余程手入れがされているのか、窓から差し込む日差しに照らされ艶やかに輝いている。廊下を抜けるそよ風に優しく揺られると、シャンプーの甘い香りがほのかに漂ってきた。

身体の線を如実に表すこの女学院の制服が、見事に均整のとれた彼女の身体を際だたせる。両手で輪を作ればその中に収まってしまうのではないかと思うほどに締まったウエスト。それとは相反して、目のやり場に困るほどに強調された豊かな膨らみ。ミニのスカートから延びる、真っ白でスラリとした生足。少女マンガに出てくる主人公の様にぱっちりとした瞳は少し潤み、廊下に差し込む日差しによつて輝いて見える。どこを見ても欠点が見当たらない。

「先生があまりにも遅いので様子を見にきました」

艶やかに煌めく薄めの唇から、可愛らしい声が放たれる。可愛いといつても「てへっ」とか「きやつきやつ」といった感じの幼いものではない。落ち着きはあるが、どこか少女のあどけなさが残る、まあ言つうなれば、可愛い女の子がいて、この子、どんな声をしているのだるつ、と自分で勝手な妄想を広げた後、実際に放たれ

た声を聞いて、「ああ、やっぱり想像通りだな」と思えるよつた、そんな声である。

「やつなの。『めんなさいね、心配をかけてしまって……あ、紹介するわ。』ひから、本田から2-Bに編入することになった『綾辻千尋』さんよ」

由里絵先生が俺のことを黒髪の美少女に紹介する。少女は俺の目をじっと見つめると、ニコッと天使の、いや天使以上の微笑みを見せた。その笑顔を見た瞬間、胸のあたりがキュンと疼いた気がした。

（何だこの感情は！　このフワフワした感覚……）

未体験の感情に戸惑う。だが決してイヤな感覚ではなかつた。

（もしかして、もう女性恐怖症を克服したのか？　俺は千尋の谷を未だかつて人類が経験したことのない期間で駆け上つたのか？）

「私、2-Bで学級委員をしています、かのつ まほりあ加納麻梨亜です。これからよろしくね」

そう言つと、麻梨亜は右手を差し出してきた。握手を求めているようだ。

（「ひつ……ひつ……」で拒否されこの先ずっと氣まずくなるよな……でも……でも……いや、大丈夫かもしれない。もしかしたら克服したかもしけないんだ。よ、よしつ）

「ひつ……ひつ……」よろしくね

自分でも声が震えているのが分かる。俺は震える手で麻梨亜の手に触れた。

（あ、あれ？ 大丈夫じゃん！ 治ってるじゃん！ やつたーつ！ やつたーつ！）

心の中で歓喜の叫び声を上げる。麻梨亜の手をぎゅっと握り、握りと握りと握り。意識が徐々に遠のいてゆくのが自分でも分かつた。そして死力を尽くした末に勝利を勝ち取り、矢吹丈とお互いの健闘を称え合おうと手を伸ばす力石徹の「じとく」握手を交わすことができないまま床へと倒れ込んでいった。俺は初日から保健室デビューを果たすこととなつた。

どれだけ眠つていたのかそれすらも分からない。近くで何か気配がする。俺は恐る恐る目をうつすらと開いて見た。それと同時に、シユツとカーテンを閉める音がした。目を開けたときには、俺は白いカーテンで周りを囲まれたベッドの上にいた。

（やべえ……俺、また気絶しちゃつたんだ。やっぱりそんなすぐにな治るはずないんだよな……初日からこれじゃ、先が思いやられるぜ……あ、そうだつ！ 俺、教室に行かない。時間が開けば開くほど、教室に行きづらくなるしな。よしつ）

ベッドから起きあがらうとしたときだつた。突然おでこに痛みが走る。痛みの場所を軽く指で触つてみると、その場所だけが少し膨らんでいた。

（痛てててつ、何だこれ？）

膨らんでいる部分を軽くなでこすり、状況を把握しようとしている

るとい、カーテンの向こうから、一人の女の子の声がした。

「ねえ、エリでしょ、うー。」

「えつ、でもエリのベッドで誰か寝てるよ」

「大丈夫。今、確かめたけど、彼女、目を覚ます気配がないから。多分、花瓶に頭をぶつけた時に氣を失ったのよ。保健の先生と春田先生、それに麻梨亜が、彼女が壊した花瓶の後かたづけをしてるし、今しかチャンスがないんだから」

「で、でも……」

「早くしないと先生が戻つて来ちゃうわ。まあ、早く脱いで。私に見せてよ」

「で、でも恥ずかしいよ」

「もうー、じゃあ私が脱がせてあげるー」

「あやあー、そんなに乱暴にされたら、制服が破けちゃう

「ほり、腕を上げて……」

「へ、うん……」

「……」

「……」

「わあっー、美嘉っ、こーっー、すいじー綺麗よ」

「そんなに見ないで……恥ずかしい」

「ふふっ、可愛い。こんなに硬くなつてゐる」

「やだっ、そんな」と言わないで。そんなこと言われると……もつと硬くなつちゃう」「う

「ねえ、早くしましょ」

「ああん、そんな、急に後ろから……こやんっ、真緒のおっぱいが背中に当たつてゐる。恥ずかしいよお」

「やあーだーあーすゞく柔らかいじゃなー」

「ああん、真緒、後ろからそんなに強くされると私……いやあん、乱暴にしないでえ」

（えつ！ えつ！ ええつ！ い、これつてまさか……いや、話には聞いたことがある。女子校では結構多いくて聞いたよな。でも実際にカーテンの向い側でそんなことが行われていてるなんて！ マジかよーー）

ぐぢこようだが、俺は女性に触れられるのが怖いだけであつて、決して女性が嫌いなワケではない。もちろん、一般男子のよつこつこうシチュエーションでは、ちゃんととした生理現象を起こすのである。

俺は息を殺してベッドから降りると、カーテンの隙間からその向こうで繰り広げられている禁断の を覗こうとしていた。

白いカーテンに指を掛ける。そーっとそれをスライドさせる。俺は目の前で身体を重ねている一人の姿に言葉を失っていた。

4に続く……

肩ぐらごままでありそつと明るい栗色の髪をポニーテールにした女が、美嘉と呼ばれる女の背中に胸を押しつかるよつと乗つてこる。

「真緒……ちよつと痛いよ」

「我慢しなさい。もつ少ししたら気持ちよくなつてくるから」

真緒と呼ばれるポニーテールの女は、保健室にはそぐわないレオタード姿の美嘉に、せりて覆い被わるよつて身体を預けた。

「いやああん、痛いよお。もつと優しくしてー」

床で両足を開き、背中を真緒に押された美嘉の身体。豊かな膨らみが床に押さえつけられ、柔らかく形を変えている。ぴつたりと身体に張り付くレオタードが彼女の豊かな膨らみを余計に強調している。

「いやあん、何かエッチ」

美嘉の姿を見て真緒が後ろから胸の方へと手を回す。

「やだあ、おっぱい触らなこでよ」

田の前で繰り広げられる乙女たちの禁断の行為に、思わず唾を飲み込む。その音が思いのほか大きかったのか、はたまた、俺が何や

ら怪しいオーラを出していたのか、突然真緒が後ろを振り返る。ぱつちりとした瞳の真緒と目が合つた。真緒はニヤリと笑うと、突然カーテンを素早く開いた。

「あ、あわわ……」

緊急事態に言葉が出ない。

「ううそり見てたでしょ、私たちのこと」

真緒がベッドに手を突き、俺の方へと身体を寄せてくる。

「もしかして、あなたもこっちなの？」

口元に妖しい笑みを浮かべながら、真緒が俺の胸へと手を伸ばしてきた。

真緒の手が胸に触れた瞬間、俺の頭に幼い頃に麗菜によつてあんなことやこなことや、そんなことまでされた記憶が蘇つて……こない？

（えつ、どうしてだ？）

「あら、嫌がらないつてことは、やっぱりあなたもこっちなのね。嬉しい！」

そう言つと、真緒が俺の首に腕を巻き付けながら、突然唇を奪つてきた。その瞬間、俺の頭の中に幼い頃、麗菜によつてあんなことやこなことや、そんなことまでされた記憶が蘇つて……くるつー。俺の身体は硬直し、小刻みに痙攣を始める。

「 もやあつー どうしたの?！」

慌てて俺をのぞき込む真緒の顔が次第にかすれてゆく。俺の意識はそのまま遠のいていった。

目が覚めると、俺は保健室の天井を見上げていた。

「あら、気がついたかしら？」

俺の顔をのぞき込む大人の女性が目の前にいる。肩まである黒髪はウエーブしている。真っ赤に彩られた薄い唇。顎の右側のホク口が何とも艶めかしい。赤縁のメガネの奥に見える切れ長の瞳が、俺をじっと見つめていた。

「お、俺……いやつ、私、一体どうしてやったのかしら……」

「ふふふ、ここでは隠さなくともいいわよ。この女学院の教師たちは、みんなあなたの正体を知っているから。ここにいるときべらいリラックスしなさい」

「そ、なんですか……良かつた……編入早々に退学しなきゃいけないと思つてしましました」

俺が言つと、彼女は一コリと笑つた。大人の女性の魅力に思わずドキッとする。クドいようだが俺は女性に触れられるのが怖いだけであつて、女性に興味がないわけではない。

「あれ、さつきの子たちは?」

保健室には白衣を着てイスに座つてゐる彼女の他に誰もいなかつ

た。白衣には『校医 水島』と書いてあった。

「ああ、結城さんなら教室に戻したわ。彼女のお友達が昼から競技会があるらしいくて、ここでストレッチを手伝っていたんですって。まあ、本当はお友達のレオタード姿が見たかったんでしちゃうけど……彼女、男の子には興味ないみたいだし」

「や、やつぱり……あ、そう言えばひとつ不思議なことがあつたんです。彼女が俺の胸に触れたとき、俺、いつもみたいに卒倒しなかつたんです。何でなんだろう……」

「ふふつ、教えてあげましょうか？」

水島先生はイスから立ち上がり、俺の耳元でそつとそんな言葉を囁いた。彼女からほのかに漂う香水の甘い匂いが鼻をくすぐる。そう言つたあと、彼女は俺が着ている制服を胸の上まで捲りあげた。

ピンク色の下着が露わになる。彼女は口元に妖しい笑みを浮かべながら、下着を胸の上へと一気にずりあげた。

ずれた下着の隙間から、フルブルとした物体が落ちる。彼女はそれを手に取ると、俺の前に晒した。俺が女装のために使つてゐる、胸を大きく見せる道具が彼女の手のひらでフルブルと揺れていた。

「直接触られたワケじゃなかつたからよ。でも気をつけなきやだめよ。周りは女の子だらけなんだし、今みたいにここがこんな風になつてたら、すぐにバレちゃうわよ」

水島先生が耳元で囁くように言つたあと、股間を指す。クドいようだが俺は女が嫌いなワケではない。

「さじと……田が覚めたようだし、春田先生に連絡しておいたから。みんなにバレないようこ氣をつけなさいね。特に今日は……ねつ。それと、後で必要になると思うから持つていきなさい」

水島先生はウインクをしながら意味深な言葉を吐いたあと、俺に何かが入ったビニールの袋を渡した。と同時に、保健室の扉が開き、担任教師の春田由里絵がやつてきた。今の時間、2-Bは由里絵が受け持つている国語の授業中だったのだ。

「私が受け持つている時間でちょうどよかつたわ。綾辻くん……あつ、綾辻さんのこと、みんなに紹介するわね」

俺たちは保健室を出ると、2-Bの教室に向かって歩き始めた。

階段を上り二階に着く。一直線に伸びる廊下には、四クラスある一年生の教室のほか、美術室や理科室などといった特別教室が並んでいる。2-Bの教室は、廊下を真っ直ぐ進み、突き当たる一つ前の教室だった。

2-Bの教室の前まで来た。教師がいないからか、教室の中は騒がしかつた。

「全く、あの子たちつたら……」

由里絵が教室の扉を開き、中に入る。すると騒がしかつた教室内が静かになつた。

「ちよつと遅れたけど、新しいお友達を紹介します」

生徒たちに向かつて由里絵が言った。

「ああ、入つて」

由里絵に促され教室に足を踏み入れる。入つた途端、俺が通つて
いた男子校とは全く違つていゝ匂いが教室に漂つっていた。

由里絵が黒板に俺の名前を書く。

「今日から私たちと一緒に過ぐすことにになりました、綾辻千尋さん
です」

そう言つと、由里絵が俺に向かつて田配せをした。びりりゅうじ
紹介をしろと言つてゐるようだつた。

教室を見渡す。当たり前だが教室の中は女子だらけだつた。みん
なの視線が俺に突き刺さる。その中に、加納麻梨亜や、結城真緒の
姿もある。麻梨亜は俺と田が会つと、二三つと優しく微笑んだ。

「えつと……今日からこの女学院に……」

キーンゴーンカーンゴーン

俺が自己紹介を始めたと同時に授業の終わりを知らせるチャイム
が鳴つた。生徒たちが一斉に教科書とノートを片づけ始める。何か
とても急いでいる様子だつた。

「あつ、そだつた。次の時間は体育だつたんだわ」

「えつ？ 体育？」

先ほど保健の水島先生から受け取つたビニール袋を開けてみる。中には赤い上下のジャージが入つていた。

「か、春日先生……次の時間つて体育なんですね」

「そつよ。体育の森山先生は遅刻するとウルサ一から、綾辻さんも早く着替えなさい」

「ど、どいで着替えるんですか?」

「どいつて、もちろん更衣室に決まつてるじゃ……あつ」

俺たちはお互に見つめ合つたまま、その場で固まつていた。

5へ続く……

「あつ……えつと、私、数学の松本先生に呼ばれていたんだったわ……わよなら————！」

「あつ！ 逃げたつ！」

担任の春田由里絵は俺の前から逃げ出した。いきなり体育なんて聞いていない。女の子たちの前で着替えて、俺が男だとバレたらどうするんだ？ 麗菜はこういう事態になることを考えなかつたのか？ まあ、俺も今、初めて気づいたのだから人のことは言えないが……。

びりしそうかと困惑つていると、俺はあることに気づいた。

（そうだ、そうだよ。下着を取らなければ問題ないじゃないか。壁に向かってこつそりと、そして素早くジヤージを着ればバレる」とはないのではないか？）

素晴らしい思いつきにホッと胸をなで下ろす。

胸？

俺は制服の胸元から中を覗いてみた。そしてある欠点に気づく。安堵の息はため息へと変わった。

（下着を取らなくてもこれじゃあバレるじゃねえか……）

下着の中に忍ばせたパッドのおかげで胸の膨らみはある。だが谷間が全くない。これではあまりにも不自然な膨らみである。

(じうすんだよ。絶対バレるよ……)

教室で一人悩んでいると、突然扉が開いた。

「ああ、やつぱりまだいたのね」

学級委員の加納麻梨亞が慌てた様子で教室に入ってきた。

「『めんね。綾辻さんはまだこの学院のこと知らないんだもんね。私ったらそんなことに気がかないなんて、学級委員失格だわ。さあ、こっちよ。急ぎましょー。』

麻梨亞が廊下に出て俺を手招きする。俺にはもう迷つている時間はなかつた。

水島先生から受け取つた、ジャージの入つた袋をもつて廊下に出て、先導する麻梨亞の後を追いかける。窓から見えるグラウンドと体育館がどんどん遠ざかつてゆく。

(ん？ 更衣室つてやけに離れた場所にあるんだな)

「この女学院の中はまだよく分からぬ。違和感を覚えつつも、俺は麻梨亞の後を追つた。

階段を下りてゆく。俺たちがそのまま地下へと下つていった。

（そつか。地下で繋がってるのか。なるほどー。）
（たまには女学院。外から女子高生の体操服姿を盗撮する輩がいるとも限らない！）
（だからなるべく外部とは接触しないように、地下道を造っているんだな……）

生徒のみならず、職員や教師全てが女子であるこの麗香女学院。自分たちの身は自分たちで守らつといふことなのだろうか。長い地下道を一人で駆けながら、俺たちはようやく更衣室にたどり着いた。

「さあ、早く着替えちゃいましょう。泳ぐ前に準備運動をしないといけないから、いつもよりも時間がないのよ」

そう言いながら麻梨亞が更衣室のドアを開けた。

（ん？ いま何かとんでもないことを言つてこたよつた気がするが、気のせいいか？）

ドアを開けて少し右に折れる短い廊下を通りて奥に入る。麻梨亞に続いて更衣室に入った俺は、目の前に広がる光景に開いた口がふさがらなかつた。俺は目の前の眩しい光景に身をのけぞらせる。

（マジか？ マジでこいつなのか？）

壁に頭を強打した俺の意識は徐々に遠のいていく。心配そうに駆け寄る麻梨亞の顔が、だんだん霞んでいった。

……

⋮

『氣づくと俺は保健室の天井を見上げていた。

「あら、氣がついた？」

保健の水島先生が、俺をのぞき込んできた。

「水島先生……俺、いつたい……」

「顔がニヤケていたけど、いつたいどんな夢を見てたのかしら？」

「えつ……俺、何か言つてましたか？」

「ええ。おっぱいがいっぱい、おっぱいがいっぱいって何度も口に出していたわ」

水島先生の言葉を聞いたあと、顔が熱くなつていいくのが自分でも分かつた。

「それよりも困ったことになつたわね……今日は運良くあなたが気を失つたからよかつたものの。今月はずつと水泳の授業があるらしいわ。何でも体育の森山先生が、世界水泳の中継を見て感化されたらしいわ。この間はワールドカップを見てサッカー漬けになつたみたいだし、その前は野球でしょう……森山先生には困つたわね。この先、あまり体育を休むと生徒たちに怪しまれてしまうわ。一度理事長に相談してみてはどうかしら？」

水島先生の言つとおり、あまりにも特異な行動をとれば女の子たちに怪しまれてしまつ。ここにいる限りはあくまで普通の女子高生として過ごせなければならないのだ……だがそれをするにはクリア一しなければならない根本的な問題があるので。

保健室を後にした俺は、その並びにある職員室へと向かつた。扉を開けた瞬間、担任の春日由里絵と目が合つた。彼女は気まずそうな顔をしたあと、すぐさま俺から視線を逸らした。

職員室を奥に進み、校章であるコリの花を象つたエンブレムのついている理事長室の扉をノックする。

「誰だ？」

中から麗菜の氣だるさうな声がした。

（何だよその眠たそうな声は。よくこれで理事長が務まるな……）

「綾辻です」

「千尋が入れ」

扉を開けて中に入る。すると麗菜がこちりに背を向けながら、机に向かつて何かをしていた。

「そろそろ来る頃だと思つていた

「おいらを向こむせば、麗菜が言つた。俺は後ろ手で扉を閉めた。

「話をするとおぐりこじつ向けよ。失礼な奴だな」

麗菜に文句を言いながら机に近づく。そのとき、俺はとんでもない光景を目の当たりにした。

理事長室の机の上に、全裸の女性が横たわっていた。それだけでも驚くには事欠かないのだが、俺を絶句させたのは、その女性は首から上が存在しないのだ。首の近くには割れたグラスの他に、室内の照明に照らされてキラリと光るノコギリがあり、ダークブラウンの机の上には真っ赤な血だまりができていた。それが机の端まで流れ、そこからポタポタと血が床へと滴り落ちている。

麗菜は振り返ると、ニヤリと口元を歪ませながら怪しい目つきで俺を見つめていた。

6へと続く……

理事長の机の上にある女性の遺体を見て、思わず腰を抜かした。

麗菜は机の上にあつたノコギリを手にとると、俺の方へと振り返り、動けないでいる俺に向かつてジリジリと近づいてきた。

「ぐ、来るな人殺しつ！」

麗菜は右手にノコギリを構えると、それを俺に向かつて一気に降り下ろしてきた。

次の瞬間、ギコギコと何かを切る音が聞こえてくる。

(ああああああああ！ 俺の首の骨がつ！)

首を両手で押さえながら床に倒れる。麗菜は俺の後ろにあつた観葉植物の枝をいつの間にか切り落としていた。

「そこで何をもがいでいるんだ？」

切り取ったフサフサの葉がつい観葉植物の枝で、机の上で割れていたグラスとその破片を集める。ゴミ箱にそれらをポイすると、ついでにその葉っぱで、机の上の血だまりを散らかした。その滴が俺の口の中へと飛び込む。鉄の味が口いっぱいに広がら……ない。よくよく味わうと、トマトジュースの味がした。

麗菜は黒革張りの椅子に座り、ふん反りかえると、遺体を前にしながら語り始めた。

「さて……お前がここにやつてきたのは予想がついている。大方、普通の体育の授業かと思って、安易な気持ちで更衣室に向かつたが、実は急遽、水泳の授業になり、おっぱいだらけの環境の中で卒倒してしまつた挙げ句、こんなことになるのは予め予想がついていただろうに、麗菜は全く何の対策もしないで俺を女学院に編入させやがつた、これから一体どうするつもりだ、と私に文句を言いに来たのだろう?」

麗菜の推理があまりにも完璧すぎて、ツツコむタイミングを逃してしまつ。

「ど、どうしてそれを!」

俺にはこの言葉を听つのが精一杯だったが、

「当然だ。お前に盗聴器を仕掛けておいたのだからな」

といつも言葉に納得する。

「それなら話は早い。これから一体どうするつもりなんだ? この先、逃げられない状況がきつとあるはずだぜ」

俺の言葉に、麗菜がふんつと鼻で笑つた。

「それなら問題ない。この遺体にお前の首を付け変えて……おい、そんなに引くな。冗談に決まっているだろ。これは私が開発した、リアル女体スース『北極三号』だ。これを着ればお前の体は誰だぞ

う見ても女に見える。さあ、試しにこれを着てみる」

麗菜はそういうと、女体スーツを俺に向かって放り投げた。女体スーツは驚くほど軽い。何の素材でできているのかは分からぬが、手触りは人間の肌と変わらなかつた。素材に興味があつたが、「本物の人の……」と言われたら怖いので、あえてそれは聞かないことにした。

制服を脱ぎ、パッドの入つたブラを外し、とりあえず下着一枚になる。俺はリアル女体スーツ『北極三号』を着てみた。

着ると女体スーツがスーツと身体に馴染んだ。一体どういう仕組みになつてゐるだらうか。人類の英知を越えた麗菜の発明に驚かされるが、どうやってこれを作ったのかを聞くのが恐ろしい。「実は私は遠い宇宙からきた……」などを言われても困るので、これもあって聞かないようにした。

麗菜は昔からこうなのだ。彼女は海外の某有名大学を首席で卒業した。しかも十一歳という若さでだ。その後、様々な分野に足を突つ込み、あらゆる分野で名声をあげた。

そんな彼女がなぜ女学院の理事長をしているのか？ その理由を先日、俺をこの女学院に編入させるという提案の席で知ることになる。彼女は俺の女性恐怖症を克服させる為に理事長になつたというのだ。

俺が女性恐怖症になつたのは、麗菜のせいである。俺がまだ幼い頃に、麗菜によつてあんなことやこんなことや、そんなことまで……と、これはもう何度も言つてるので割愛するが、麗菜は麗菜なりに責任を感じてしまったのだろう。

俺が涙を浮かべて礼を言おうとするが、『それは表向きの理由で、千尋に女装させて女学院で生活させるのが、なんか面白やつだったから』と本音をもらしやがった。

「どうだ？ どうか、どう見ても女だろ？』

理事長室にあつた鏡で全身を映してみる。麗菜の言つとおり、自然な膨らみもあるし、ちゃんと毛も生えている。

「見た目だけではない。』のスースがあれば、ある現象も抑えられるのだ。今からそれを試してやる』

そう言つと、麗菜は机の上にあつた電話で誰かを呼びだした。少し間があいて……

「失礼します」

ノックのあと、担任の春口由里絵がつづみきながら部屋に入ってきた。そして後ろを向きながら扉をしめた。

「あの、何か用ですか？」

顔を上げた由里絵が言葉に詰まる。彼女は全裸で立つ俺を見て目を丸くした。

「な、な、な、な、な、な、何をしてるんですか？」

顔を真っ赤にしながら麗菜に尋ねる。

「何を照れている。お前は千尋が男だと知っているだらう。これは作りものだ」

由里絵は「あつ」「つ」と合点がいったようだつた。

「それにしてもよくできていますね。私、本当に裸の女の子が立つていると思つてしましました。理事長はこれを見せるために私を呼んだのですか?」

「いや、そういうではない。春日先生。ここに立ちなさい」

「えつ? ここですか?」

俺の前に由里絵を立たせると、麗菜は後ろから彼女の服の裾を持つと、ブラのカップに指をかけつつ、それを胸の上まで一気にめぐりあげた。

「ふるんつ!」

と、音がしそうなほど大きな乳房が大きく揺れる。

「きやああああああつー!」

突然の出来事に由里絵は悲鳴を上げる。俺の目は彼女の胸にくぎ付けになつた。

「ふふふ、どうだ千尋。彼女のおっぱいを見て興奮しても、それが全く分からぬいぞ」

麗菜に言われて股間に視線を落とす。彼女の言つとおり、男なら

ば必ず起きたる生理現象が、リアル女体スーツ『北極三号』によって押さえつけられているのだ。

「ふふふっ！ 見たか私の実力を。だがスゴいのはこれだけではない。指でいじつやつていじると……」

麗菜が女体スーツの胸の先っぽを指でいじる。

「なんと… ちゃんと乳首が硬くなる」

理事長室の棚になぜか置いてあつたハリセンで、麗菜の頭を思わず叩く。小気味よい音が理事長室に響いた。

数分後……

「だ、大丈夫？ 綾辻君……」

由里絵に身体を起こされ、ティッシュで鼻血を拭つてもうう。身体に彼女の手が触れているにも関わらず卒倒しない。

「あれ、何でだ？ 身体を触られているのに……こつもとは違う」

俺が戸惑っていると……

「当然だ。直接肌に触れられているわけではないからな。この『北極三号』は、そういうことを防ぐ役割もある。それなのにお前といつやつは……だいたいお前は昔から……」

せつときのハリセンをまだ根に持つているようだ。昔の話まで持ち

出し俺に文句を言つてくる。半殺しこなされた俺は由里絵に手を借りて立ち上がった。

「早く女子寮へ行け。お前の恐怖症が早くなさうに、私が適任な生徒を選んでおいた。ルームメイトとは仲良く過ごすんだぞ。色々意味でな……」

麗菜は意味あいづな言葉を吐いたあと、理事長室から出でていった。

7へ続く……

担任の春日由里絵に案内され、俺は女学院のすぐ隣にある学生寮『百合の園』の門の前に立つた。名前からして向やら女子めいた雰囲気である。

女子寮は煉瓦調の外観をもつ古びた洋館だった。赤褐色の壁にはツタが絡み、中庭には白いテーブルが幾つか置かれている。洋館の周りには薔薇の生け垣がある。いっそのこと、名前を『薔薇の園』に変えた方がよいのでは、とジックリを入れてしまいそうになるほどに薔薇が咲き誇っていた。

洋館の入り口は重厚な木製の扉になつていてる。

「綾辻君……出してください」

（出す？ 何をだ？ 今の俺で出せるものとこつたら……）

制服をベロリとめくら、とつあえずおつぱこを出してみる。

「ち、違います！ 学生証を出すんです！」

由里絵は慌てて制服の裾を持ち、俺の胸を隠した。そして編入してきたときにもらったパスケースの中からカード型の学生証を取り出す。

「リリにかざして

ドアの横にある小さな機械にカードをかざしてみた。ピッシュと電子音がした後、ドアの向こうでロックが外れる音がした。意外とセキコリティはしっかりしている。古いのは外観だけのようだ。

ドアを抜けで中に入る。ホールには南国のフルーツのような甘い香りがほのかに漂っている。一階までの吹き抜けになつていて、建物をぐるっと囲むように廊下があり、そこにそれぞれの部屋の扉がある。廊下に出れば、どの部屋からでもホールが見える作りだ。逆も然り。ホールからどの部屋の扉も見えるようになつていた。

ホールの中央へと歩を進める途中で、俺は何か違和感を覚えた。ゆつくりと後ろを振り向く。右斜め後方に、何やら小さな窓があつた。

身体は前を向いたままで後ろへと一歩戻る。窓の前で立ち止まる。そこには老婆が一人座っていた。

（あ、この寮の管理人のおばあさんのかな……これからこの寮でお世話になるんだから挨拶しておかねば……）

小さな窓を横にスライドさせた俺は、椅子にひざと座る小さなおばあさんに声を掛けた。

「あの、今日からお世話になります、綾辻千尋と申します。これからよろしくお願いします」

なるべく女の子らしくしようと、首を右に少し傾けながらこうと笑う。

「……」

だがおばあさんは無反応だった。

(耳が遠いのかな?)

「あの――――――。今口からお世話をになります――、綾辻千尋
で―――す」

大きな声で言つてみた。だが結果は同じだった。それどころかお
ばあさんは先ほどから微動だにしない。

「ん? もしかして人形なの? 一応形だけ管理人が居ますよつて
ことにしてるんですか?」

横にいる由里絵に尋ねた。

「生きとるわ――」

突然人形がしゃべりだした。

「わッ! びっくりした!」

「話は理事長から聞いておる。部屋は一階の204号室じゃ。理事
長もお前さんとあの子を同じ部屋にするとは……くくく……せい
せい仲良くするんじやな……こんな意味でのお」

麗菜と同じく、意味深な言葉を吐く老婆。俺はなんだか背中のあ
たりがゾクゾクするのを感じていた。

管理人のトメさんに部屋の鍵をもらつた。一階へと続く螺旋状の階段に足を掛けると、俺に向かつて由里絵が声を掛けた。

「じゃ、じゃあ、私はこれで…… もよなひ————」

「あつ、春日先生！」

由里絵の『さよなら——！』が出たときは、何か都合が悪いときだと、俺は学習していた。イヤな予感を抱きつつ、俺は一階へと続く階段を上つた。

廊下には赤い絨毯が敷かれている。フワフワとした感触の床を歩きながら、扉にあるプレートを見た。

シックな色合いの木製のドアだ。よほど手入れがされているのか、扉はワックスを掛けたように艶がある。真鍮のドアノブの下に鍵穴があり、鍵はドアノブと同じ材質でできている。クローバーをモチーフにした持ち手から、五センチほどの細い胴体があり、先端にレレのおじさんの歯のような、隙間が開いた二つの突起が並んでいた。

「203……204、あつた、ここか」

204のプレートが掲げられた扉の前に立つ。その扉を見たとき、俺はある違ひに気がついた。

他の部屋の扉はツヤツヤと輝いているのに、この部屋の扉は艶が全くない。何年も使つていないうな、そんな廃れた感があるので。俺は鍵穴に鍵を差し込むと、それを反時計回りに回した。

力チャ
……

鍵が開く音がする。どこか冷たい雰囲気。真鍮のドアノブに手を掛けると、ノブを回して扉を開けた。

ギイイと扉が軋む音がした。次の瞬間、冷たい風が頬を撫でる。

(ひいっ！)

思わず肩をすくめてしまった。

恐る恐る部屋の中に足を踏み入れる。すると突然、扉がバタンと大きな音を立てながら勝手に閉まった。

後ろに誰かいる気配がある。俺は恐る恐る後ろを振り向いた。そこには、長い黒髪を顔の前に垂らす、一人の女の子の姿があった。

8へと続く……。

女の子の髪が前に垂れて入るので、彼女の顔を窺い知ることがで
きない。

「う、う、うんこちわ」

とつあえず挨拶をしてみるが、彼女はうつむいたままだった。

「あ、あの……今日からあなたと同じ部屋で生活をすることになっ
た『綾辻千尋』です……あ、あなたの名前は？」

「……です……」

『です』だけ聞こえたような気がした。

「えつ？」

もう一度聞き直す。

「レイです……」

彼女は相変わらずひつひつたまま、蚊の鳴くような声で言った。

「れ、レイさんですか……」「、一年生ですかね？」

「……一応、そう言つことがありますかね……」

何か意味ありげな言い方をする。ちょっと変わった子のようだ。

「あの。顔を上げてもらつてもいいかな？ルームメートなんだし、あなたの顔を見てみたいの」

「……私……ブスだから……」

「そ、そんな」と言わないで見せてくれないかな？」

「……笑いませんか？」

「わ、笑わないよ」

「本当に？」

「ほ、ホント、ホント」

「じ、じゃ……少しだけ……」

彼女はそう言つと、うつむいたまま、両手で髪をかき分けた。

「本当に笑いませんか？」

（……く、くどい……）

「大丈夫よ……笑つたりしないから」

俺は無理矢理笑顔を作りながら言った。

「分かりました……あなたを信じます……」

やう言つと、彼女はゆっくつと顔を上げた。やつやまで髪で隠れていた彼女の顔が露わになる。

「……」

彼女の顔を見た瞬間、全ての動きが止まつた。

可愛いのだ。

俺が見た女子の中で一、一を争ひはじく……。

ぱつちりとした二重まぶたが印象的である。小顔の割に目が大きいので、目が異様に大きく見える。まるで少女マンガの主人公のような瞳をしていて、とても澄んでこむ。目を合わせるとその美しさに吸い込まれそうになつてしまつ。

鼻はわざと二重まぶたをしていて筋も通つてこる。唇も程良いプチクリ感がある。透き通るような肌をしていて、ブスビリか、めちやくちや可愛い女の子だった。

「やつぱつ見せるべきではあつませんでした……」

俺の反応を見て、彼女は落ち込んだよひむいた。

「へ、ひつと、違うの。… いやさんがあまりにも可愛いからつこ見とれちやつたの」

「……本当にですか？」

「……本当に？」

「……本当にですか？」

「……本当にですか？」

「最高ですか？」

「セーリウム……ん？」

何か昔、テレビで見たニュース映像が頭をよぎった。

「レイちゃんは本当にブスじゃないわ。私が保証する。だからもつと自信を持つて顔を上げてよ」

俺が言つと、彼女は再び顔を上げた。

「ほり、やつぱり可愛い」

俺の言葉に彼女が少しはにかんだ。照れながら笑つその顔が本当に可愛い。

「これからルームメイトとしてよろしくね」

「口と笑顔を見せて言つ。本来なら口で手を出して握手なり、ハグなり、口助なりをするのだろうが（最後のやつは全く関係ないが……）、そこは女性恐怖症の俺（厳密には、女性に触れられると過去の記憶が蘇り、身体に変調をきたす）なので、そこは敢えて

笑顔だけですませておいた。

ルームメイトであるレイへの挨拶を済ませると、俺は改めて部屋の中を見回してみた。

薄暗い部屋の中にはロフトベッドが一つ、両側の壁にぴたりとつけられ置かれている。ベッドの下のスペースが机になつていて、そこで勉強ができるようになつていた。

各部屋にトイレとバスはあるのは有り難かった。いくらリアル女体スーツ『北極三号』があるとはいっても、極力、裸で女子と交わることは避けたい。部屋でお風呂に入れるのは俺にとつては好都合だった。

ふとレイの使つているロフトベッドが留まる。布団はホテルの客室係が施してくれたのかと思つほどベッドメイクは完璧で、机にある辞書や教科書やノートもまるで使つていないのではないかと思つほどにキチンと棚に収まっている。そこからレイはとても几帳面な性格なのだなということが分かつた。

レイのベッドの向かいにある俺の机に荷物を置くと同時に、部屋の中にチャイムが響いた。

「えっ？ じのチャイムは何？」

学校内ではないにも関わらず、チャイムが鳴る。不思議がつていると、

「今のは夕食を知らせるチャイムですよ。夕食は寮生みんなで取るのが決まりなんです」

部屋の壁に掛かっている時計を見た。針は18時を指していた。

「もう二回も時間なんだ」

「先に行つてもらえますか？ 私はちょっと……」

「あ、うん、分かった。じゃあまた後でね」

レイを部屋に残し、俺は部屋を出た。

「あつ、綾辻さん」

階段を下りてこると、後ろから声を掛けられた。振り返ると加納
麻梨亞がいた。

「あ、加納さん。あなたもこの寮生だったの？」

「うふ。そうよ。綾辻さんはまだ寮の中を知らなかつたわよね。食
堂は二回も……それから、これはちょっとお願ひなんだけ
てくれるかな？」

「ん？ 何かしら？」

「綾辻さんって呼ぶのも何だか堅苦しいから、千尋つてよんでもいい
いかしら？」

「ええ、もう二回もいわよ

「本当？ じゃあ私のことも麻梨亞って呼んでね」

「うん、分かった。じゃあ麻梨亜、早く食堂に行きましょ。私、もうおなかペコペコ……ねえ、どうでも良い話しだけど、何でおなかが減るとペコペコって言うのかしら……」

「えっ？ 何でだろ？……でも千尋って結構変なことを気にするのね」

クスクスと笑う麻梨亜。俺はその笑顔に胸のあたりがまたキュンとうずいた。一人で談笑しながら食堂へと向かつた。

食堂には長いテーブルが一つあった。寮の部屋数は全部で十二ある。一つの部屋に一人が生活するので、寮生は全部で一十四人だ。一つの列に六人が掛ける。俺はトレーに載せられた夕食をワゴンから取ると、麻梨亜と一緒に、一番奥の席に座った。麻梨亜が端に座り、俺がその横に座る。すると、俺の横で誰かがイスを引いた。見上げると、そこには結城真緒がいた。

「あなたも寮生だったのね。嬉しい！」

真緒が妖しい笑みを浮かべながら言つた。真緒がイスをこちらへと寄せてくる。俺は麻梨亜の方へと身体をずらした。

全員が席に着いたところでお祈りが始まった。俺は戸惑いながらも、みんながしているように胸の前で手を組んだ。お祈りが終わつたあと、みんなが一斉に食事を始めた。

今日のメニューはビーフストロガノフだった。スプーンですくい、口へと運ぶ。料理はとても美味しかった。

雑談をしながらの食事は楽しかつた。男同士で食べるよりも、元気で明るい女子の声を聞いて食べる方が美味しいような気がした。再三言つてゐるが、俺は女性恐怖症であつて女性嫌いではない。こうこうの雰囲気の中で食べるのもなかなか良いものだと思つた。

夕食も中盤に差し掛かつたところだつた。真緒が盛り上がり始めたスイーツの話しから急に話題を変えた。

「それにしても、千尋はよく一人での部屋で生活できるよね……私なら怖くて夜眠れないかも……」

「えつ？ 一人？」

俺は真緒の言つた言葉に何か違和感を覚えた。

9へと続く……

「うん。新しい生徒が入ってくるって聞いたときには、どこの部屋を使うんだろうって思つてたの。だって一室を除いて空いてる部屋なんてなかつたし。でもまさかあの部屋を使うなんてね~」

真緒がフォークで突き刺したサラダのキュウリを口の中へと放り込んだ。ポリポリと小気味よい音がした。

「えつ？ でも、私、一人じゃないよ。ちゃんとレイちゃんが……

「レイちゃん？ そんな子いたっけ？」

「いたよ。黒くて長い髪のすこく可愛い女の子

そう言いながら、俺は食堂を見渡した。真緒に彼女のこと教えようとしたのだ。だが、食堂を見渡しても、どこにもレイの姿はなかつた。

「千尋つたら面白い。でもそれが本当なら逆に怖いけど。それで、宿題終わらせなきゃ。レイちゃんのお話、また聞かせてね

夕食を全て食べ終わった真緒が、トレーを持つて席を立つた。

「あ、ちょっとー。まだ聞きたい」とが……」

俺が言つと、真緒は手を振りながら食堂から出でていった。

「ねえ、 麻梨亜は知つて……」

横にいる麻梨亜に聞こいつと思つたが、そこにはすでに麻梨亜の姿がなかつた。食堂を見渡すと、麻梨亜も真緒同様、食器を片づけている。

「ちょ、 ちょっと麻梨亜ー、 聞きたいことがあるんだけど」

麻梨亜に向かって言つと、

「『めんなさい……私も宿題をしなきゃいけないから……』

俺と視線を合わせず、うつむいたまま麻梨亜が言つた。 麻梨亜は小さくお辞儀をすると、慌てて食堂を出ていった。

他の生徒たちも俺と田を合わせようとしてしない。急ぐよつと夕食を済ませると、みんな食堂から出ていってしまった。

（な、何なんだ……）

食堂に一人取り残された俺は、残っていたビーフストロガノフを搔き込むように食べると、食器を片づけ、自分の部屋に戻つた。

204回……

「やつぱりいるじゃない……」

「何がですか？」

部屋に戻るとセレーニティが僕の姿があった。レイは僕の言葉に不思議そうな顔をした。

「ううん、何でもないの。気にしないで

「…………」

「それより、夕食の時に姿を見かけなかつたけど、体調でも悪いの？」

透き通るような白い肌をしてるレイ。顔の色も本当に透き通るような白い色をしてるのだ。かといって、体調を崩したときのような青ざめた色ではない。

「…………。ちょっとお腹が痛くて」

（やうなのか……まあ、女の子だからね）

お腹といえば、何だか下腹部がもぞもぞしてくる」と口づいた。夕食の時、水を飲み過ぎたのかもしない。俺は部屋に備え付けてあるトイレに駆け込むと、鍵を閉めて便座に座つた。そして座つたところであるとても重要な事柄に気づいたのだ。

（これって……やっぱり脱がなきゃいけないよな?）

視線を股間へと下ろす。ついていくべきものがついていない現実を直視する。このままジャーすれば、やはり北極(三号の中は)いや、ジャーならまだましだが、ふつとなると……。

悲惨な状況が頭に浮かぶ。俺は慌ててリアル文体スース『北極三号』に手をかけた。かけたはいいのだが……。

(ん? これ、どうやつて脱ぐんだ?)

麗菜に脱ぎ方を聞くのを忘れていたことに気づく。俺は急いでパンツを上げると、トイレを出てケータイを手に取った。

麗菜の番号に電話を掛ける。

トウルルルルル トウルルルルル

出ない

トウルルルルル トウルルルルル

……出ない

ルールルルルルル ルールルルルル

……キタキツネを呼んでいる場合ではない

トウルルルルルル トウルルルルルル ガチャ

(よしひ！ 繋がった！)

「甘いぞ千尋！ 電話に出たと思つたら大間違いだ。私は今、理事長室で人には言えないとをしているので電話に出ることができない。用があるなら発信音の後にメッセージを入れる。覗きに来たらぶつじる…… ピ――――――」

(……何で俺宛の留守電メッセージ……あいつ、俺以外から電話が掛かってこないのか？ それにしても最後の途切れた言葉が気に掛かる……)

麗菜は理事長室にいるようだ。とにかく早く理事長室にいかないと……。

女体スーツを着て以来、トイレに行つていないことに今更ながら気づく。行つていないと思うと余計に尿意が増してきた。

「ちょっと出かけてきます！」

「はい……お気をつけて」

胸の前で小さく手を振りながら見送るレイを部屋に残し、俺は廊下に出ると、小走りで階段へと向かった。走ると出てしまいそうなのだ。

階段ができるだけ早く駆け下り、寮の出入口口に手を掛けた時だつた。

「ビルへ行くのじゃ？」

後ろから高い声がした。よく時代劇などで、眉毛をまん丸にして、真っ白な顔をしたオッサンが『麻田は……おじやる』と言つような高い声だ。俺は慌てて後ろを振り返つた。だがそこに誰の姿もない。俺は再び出入り口に手を掛けた。

「ビルへ行くのじゃ？」

また後ろから声がする。振り返つてみても誰もいない。俺は深呼吸をひとつして、冷静になつて考えてみた。そして俺はある結論に達した。

（やうが。この扉にはセンサーがあつて、時間外に誰かが外に出ようとするとき、センサーに反応して音声が流れるんだ。門限を破つて外に出ようとする後ろめたい気持ちがあるから、この程度の音声でもビックリしてしまい、外に出なくなるつて考えてるのかもしねない。ふふふ。麗菜の考えそつなことだぜ）

この寮のセキュリティを解析した俺は、ニヤリと口をゆがませながら、ゆっくりと扉を押した。外から爽やかな秋風に乗つて虫の声が流れてくる。外に出ようとしたときだつた。俺は何かに足を取られバランスを崩した。

扉に手を掛け、何とか転倒は免れた。足元を見てみたが、何もつまづくものなどなかつた。

（何だよ……ああ、今までけつとせつやつたじゃないか……）

気を取り直して外に出ようとする。

「ビニに行くのじゃ」

再びセンサーに反応し、音声が流れる。俺は音声を無視し、扉を開いた。するとまた何かに足を取られる。だが今回は扉を開いていたため、それに捕まることができずに見事に転倒した。

（痛たたた……）

ぶつけたおでこをわざわざながら立ち上がる。

「何度も言わすからじゃ」

後ろから先ほどの音声とは違う言葉が聞こえる。俺は慌てて後を振り返った。だがそこには誰の姿もなかつた。その代わり、手首のあたりで切斷された人間の手に、俺の足首はしっかりと掴まれていたのだった。

10へ続く……

足首をしつかりと掴む手首に思わず絶句する。人間、本当に怖いときには悲鳴など上げる余裕がないのだなと、俺はこのとき初めて知った。それと同時に何か暖かいものが俺の足を伝つてゆくことに気づく。俺は慌てて、キュッと下腹部を引き締めた。何とか少しの放尿で免れたようだった。

改めて足首に視線を落とす。だがそこには先ほどの手首は存在していなかつた。

「な、なんだ……俺の見間違いか……おしつこを我慢しきれて幻覚を見たのか……うんうん、そうに違いない。そこに違いないんだ……って、そんなはずあるか！」

「何を自分にツツコんでおるのじや？ お主は男で、周りにはオナ『だらけ……ツツコむ場所が沢山あるのに、それにツツコむことができないジレンマに気でも違つたか？ ふあふあふあふあ」

周りを見渡しても人はいない。どこからか聞こえてくる下ネタの発信源を探すがどこにもない。

「やじやじやじやじや」

足元から声がする。下を向くと、そこには管理人の老婆がいた。

俺を見上げて中指を立てる老婆。いつこの場でマジックサインだろ？！とツツコミを入れる間もなく、老婆は軍人が地面を這う前に進むような形で俺に近づくと、俺の足首を特製のマジックハンドで掴んでいた。

「な、何やつてるんですか？」

「それせひつちの台詞じや。こんな時間じついたいどこのへ行くのや？」

老婆は俺の足首を掴んでいたマジックハンドを操作しながら尋ねてきた。

「ちよ、ちよつと野暮用です」

出来るだけ可憐りしく答えると、老婆は……

「キモつー。」

ヒ、ギャルのよくな口調で答えた。

「あ、キモつて……あんた一体何歳だ」

思わず地の言葉が出てしまつ。気づいて言葉を直すとするが、

「おまえが男なのね」とババとしておるわー

ヒ、淡々とした口調で言われる。

「えつ？ ど、どつして分かつたんですか？」

リアル女体スーツを着ているし、女の子に見えるように仕草に気をつけていた。まだ誰にもバレていないのでこの老婆にはバレてしまつていいようだつた。

「だてに女を九十年やつてゐんじやないよ

（きゅ、九十だつたのかこのバアちゃん……）

「な、何でバレたんですか？ 教えてください……今後の役に立つかもしれないから」

「教えてほしいか？」

「はい、是非」

「よし、お主は素直そひじやから話してやる。そひじやのお、どこから話せばよいかの。ワシの勘が鋭くなつたのは、ワシの亭主が他のオナゴのところに通じ詰めているのではないかと疑い始めた頃だつたかの。あの当時、亭主と仲のよかつた坂本竜馬が亭主を誘いに……」

老婆は思い出に浸りながら語り始めていた。作戦成功。こつこつバアさんには昔話を語りせんに限る。俺はそのスキに女子寮をあとにした。

少し時間をロスしてしまつた。尿意はどんどん高まつてくる。少し漏らしてしまつたが、このままではスーツの中が大変なことになつてしまつ。俺は競歩のよつて腰をくねくねさせながら理事長室へ

と急いだ。

それにしてもどうして老婆には俺が男であることがバレてしまつたのだろうか？ 彼女の昔話の出だしでは、勘が鋭くなつたのは亭主の浮気がどうたらこうたらと言つていたから、俺の正体を見破つたのは、老婆の（いや、妖怪と言つべきか）勘なのだろうか。だが今はそんなことを考へてゐる場合ではなかつた。高まる尿意に身体の震えが止まらない。ようやく女学院の校舎にたどり着くと、一滴出した。

校舎はすっかり明かりが消えている。廊下は薄緑色のランプに照らされ不気味な雰囲気を醸しだしている。誰もいない廊下を競歩の選手のごとくクネクネ歩く。歩く度、上靴を履いた俺の足音が、ひつそりとした廊下にこだまする。俺は恐怖に怯えながら、職員室の前を通り過ぎた。

廊下から中を見る。明かりはついているが、中に人の気配はなかつた。

職員室の中から理事長室へ入ることも出来るが、もし誰かがいたら厄介だ。中には誰もいないようだが、俺は安全な方を選んだ。理事長室の正面の扉から入る方が確実なのだ。

職員室の横にある理事長室の扉の隙間から明かりが漏れている。留守電メッセージの内容から分かるように、中に麗菜がいるのは明らかだった。俺は理事長室の扉の前に立つた。

すると、中から何やら人の声がする。麗菜の他に誰かいるのだろうか？ 他に人がいるとなると少々厄介だ。俺は理事長室の扉にぴつたりと耳をあてると、そこから中の様子を窺つてみた。

「んん……はああん」

女の荒い息づかいが聞こえる。

(ん? 何やつてんだ?)

もつ一度耳をくつつけ、中の様子を窺う。

「はああん……んん……あああん」

鼻に掛かったよつた甘えた声が聞こえる。その他には声がない。
どうやら中には麗菜一人のようだつた。

念のためもう一度確かめてみる。

「ああ……はあああん……んん」

やはり麗菜の甘えた声しかしない。俺は理事長室の扉のドアノブを握ると、それを回して扉を開けた。

11へと続く……

理事長室の扉を開くと、そこにはピッタリとしたレオタードのようなウェアを着た麗菜の姿があった。

薄いピンク色の生地から肌が透けて見える。汗をかいているからその透け具合はハンパない。形のよい膨らみに視線をやると、こちらが照れてしまいそうな程の透け具合だ。股間に視線を移すと、そこはR15指定では表現できない状態になっていた。汗に濡れたウェアを着たまま、麗菜は理事長室に持ち込んでいたトレーニングマシンで筋トレをしていた。

「相変わらずやせこしい奴だな」

「う、うるさい……はあん……誰にでも欠点はあるものだ……あん……それより……はああん……何の用だ？」

「人が聞いたら勘違いするから一旦筋トレをやめろ」

先ほどからずっとマシンでトレーニングを続ける麗菜に忠告する。筋トレをする際、麗菜は誰がどう聞いても勘違いをする声を出すのだ。普段は低い声で男の様なしゃべり方をする麗菜。筋トレの時だけは鼻に掛かったような甘い声を出す。本当にやせこしい奴だ。麗菜は珍しく俺の言つことを聞くと、机の上にあつたスポーツドリンクを手に取ると、腰に手を当て、オッサンの「とくぐビグビと飲み始めた。

「ふふあー！　このために生きてるなー！」

オッサンの様に唸る。スポーツドリンクを机の上に置くと、麗菜は俺の顔をじっと見つめた。

「で、用件は何だ？」

「ああそりだつた……。このスース、一体どうやって脱いだらいいんだよ。おしつこが漏れそうなんだよ」

「ふつ……それはそれで面白いじゃないか」

「人事だと思つてこの女……もしスースの中がたっへんたっへんになつたら、ここで腹を割いてやるからな」

「……それは困る」

「じゃあ脱ぎ方を教えて」

「ふつ、簡単なことだ。背中にあるポツチを押せ

「せ、背中？　どこのあるんだよ」

「背中の真ん中のあたりだ」

俺は右手を左の肩から背中に回し、ポツチを探した。なにやら背中に突起の様なものがいるが、指先がほんの少し触れるか触れないかの場所があるので、それを押すことができない。ならばと、俺は下から手を伸ばしてポツチを押そうとした。だが下から手を伸ばしても、指先が触れるか触れないか微妙な場所にある。

「恐ろしく身体が固い奴だなお前は……毎日ストレッチをしろ、ストレッチを」

「おい。呆れてないで押してくれよ」

「まつたく……しょうがない奴だ」

麗菜はヤレヤレといった感じで俺の背中にあるポッチを押した。ぴつたりと張り付いていたスーツが緩む。俺は肩から順にスーツを脱いだ。

「やばい。おじつ」ができると思つと我慢できなくなつてきた

俺は下着の上から股間を押さえたまま廊下へと飛び出した。長髪のウイッグをつけたまま、下着一枚で股間を押さえながら廊下を走る姿はまさに変態だ。学院内に誰もいない時間で良かつた。もし誰かにこんな姿を見られたとしたら……。

そんなことが頭をよぎつたと思つていたら、田の前で絶句する女性が一人。俺の方を指さしながら、ワナワナと震えているではないか。

「あ、あ、あ……」

田の前にいる春日由里絵は悲鳴を上げよつとしている。俺は無意識のうちに彼女の口を手で塞いだ。塞いだはいいのだが……。

俺は今、リアル女体スーツ『北極三号』を脱いでいる。そして俺の手が春日由里絵の唇に触れている。彼女の柔らかな唇の感触が手

のひらにあたり、身体を密着させているので、彼女の巨乳が俺の身体に触れている。次の瞬間、俺の頭の中に幼い頃麗菜から受けたあんなことやこんなことやそんなことが走馬燈のよつて駆け巡る。俺の意識は徐々に薄れていったのだった……。

どれだけ時間が経つたのか分からぬが……

「まったく……高校一年にもなつてお漏らしをすることは……一滴も残すなよ。我が女学院がお前の小便で汚されてしまふなんて……女学院始まって以来の汚点だ」

胸の前で腕を組みながら不機嫌な顔で俺を見ている麗菜。

（何だよ……元はと言えばお前が脱ぎ方を説明しなかつたのが悪いんじやないか……）

心中でそう叫びながらモップで廊下をしつかりと掃除する。

「文句を言わさないでやせー」

「何も言つてないだろー」

「心の中で言つてこただろー」

「お前は俺の心が読めるのか？」

「ああ、お前のような単細胞の心を読むことなど造作もない」と

「じゃあ今なにを考へていたか当てる見やうよ」

「よし、当てるやうう。あーあ。俺が女性恐怖症じゃなかつたら、女子寮にこる女の子たちとやつまくりなのにな……だらう~」

「……」

「ふう、図星か」

「や、そんなことより……」

「なぜ急に話題を変える? スケベ心を読まれたことがそんなに悔しいのか?」

「や、そんなんじゃないぜ。ほ、本当に聞きたいことがあるんだ」

「聞きたいこと? 何だ?」

「俺のルームメイトのことだ。彼女は一体何者なんだ? 寮生たちに聞いても知らないって言つて、親切な加納麻梨亜も話をはぐらかすし……彼女は一体」

「そんなんに知りたければ教えてやう。彼女はレイだ」

麗菜が高慢な口調で言い放つ。

「何を偉そうに言つてるんだ。彼女の名前はもう知つてゐて。俺が知りたいのは彼女の素性だ」

「だから、彼女はレイだ」

「お前バカか？」

「さやあつ！ 綾辻君！ 大丈夫？ 死んでない？」

麗菜の延髄切りをまともに食らい日の前に星が飛んでいるが何とか生きている。そばにいた春日由里絵が心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「何すんだよ！ お前が悪いんだろ？ 同じ答えを言いやがって」

「私は悪くない。悪いのはお前だ。私はちゃんと答えたではないか。お前のルームメイトであるレイは……」

麗菜は窓ガラスにハーツと息を吹きかけた。窓ガラスが白く曇る。麗菜はそこに『靈』という文字を書いた。

「お前のルームメイトのレイは靈なのだ」

12へと続く……

突然の告白に、一瞬頭が真っ白になつた。だが消えかかる恋の『靈』の文字を見ながら気持ちを落ち着かせる。冷静になると、寮生のあの態度やトメさんの遠回しな言葉の意味が理解できた。

「じゃ、じゃあお前はあの部屋に幽霊がいることを知った上で俺をあの部屋に住まわせたのか?」

「ナウヒーリー」とだ

「何でそんなことするんだよつー...」

「何でだと? そんなこと決まつていいじゃないか。同じ部屋で生活をするとなれば、お前が男であるということが遅かれ早かれ気づかれてしまうことになるだろ。その点を考慮すれば、レイとの生活はお前にとつて都合がいい。だつて幽霊だもの」

どこの詩人のような言葉で締めくくる麗菜。彼女の言つていることも一理ある。例えばトレイの時だ。トレイに行くときには女体スーツを脱がなければならない。レイ以外の女の子がルームメイトだとしたら、毎回バレないかハラハラしながらスーツを脱がなければならぬのだ。通常ならばそれを隠すのは可能だろう。だが今日のような緊急事態がこの先起こらないとも限らない。いや、必ずそういう状況に追い込まれることもあるだろ。もしかして麗菜はそこまで考えて俺をレイと同じ部屋にしたのではないか? 俺の中ではそんな結論に至つていた。

「それに……」

「それに？」

「お前と幽霊が一緒に生活するといふも見てみたい。だって面白そうだし」

（本音はそつちかつ…）

俺は心中でツツ「//」を入れた。でもまあ、麗菜の言つとおり、この方が都合がいいのは確かだ。春日由里絵が手渡してくれた文体スースに俺は袖を通した。

スースが身体に馴染んでゆく。廊下の窓に映る全裸の姿は、どちらどう見ても女子高生である。俺は服を着ると、その場を後にしてた。

女子寮に戻つて入り口のドアを開けた。玄関先では、上向き加減で目を閉じながら、トメさんが昔を思い出すよつて一人で話をしている。俺はトメさんに気づかれぬよう、後ろに立ち、昔を懐かしむ老婆の話を聞いていた。

「……とこつワケじや」

「へえ…… そうだったんですね」

あたかもずっと話を聞いていたよつて返事をする。全てを話し終えたトメさんは満足そうな笑みを浮かべながら管理人室へと姿を消した。

一階へと続く階段を上つて廊下に出る。俺は204号室の前に麻梨亞の姿を見つけた。

扉の前で何やらそわそわしている。ノックしようかしまいかを迷つているようだった。俺に何か用事があるのでどうか。

「麻梨亞、どうしたの？」

少し離れた場所から彼女に声を掛けた。彼女はビクッと肩をすくめながらこちらへ振り向いた。

「あつ、千尋……部屋にいなかつたんだ」

「うう。ちよつと理事長に用事があつて」

「理事長に？　よく外に出られたわね。管理人のトメをさんで止められなかつた？」

「あ……うん、止められたけど何とかうまくまかせたから……それよりも、私に何が用？」

制服を脱ぎ、普段着に着替えている麻梨亞。お尻のあたりまで隠れるグレーの部屋着に、黒のレンギンス姿の彼女。髪はしつとりと濡れ、そこからフルーティーな香りが漂つてくる。どうやらすでにお風呂に入ったようだった。

「えつと……千尋に話したいことがあつて」

「私に？　なになに？」

「あの…………ジジやちゃんは…………よかっただけカンジで嘘れない?」

「うん……いいけど」

この寮にはラウンジなるものが存在するのかと少し驚いた。俺は麻梨亜に続いて一階へと続く階段を下りた。

ラウンジは食堂のすぐ隣にあった。いくつか丸テーブルが置かれていて、普段はここでトランプをしたり、おしゃべりをしているのだと麻梨亞が言っていた。今日は珍しく誰の姿もなかつた。俺たちはテーブルのひとつに向かい合いつ形で座つた。

麻梨亜は何か俺に言いにくことでもあるのだろうか。わざわざソワソワして落ち着かない様子である。どうも彼女からは言こと出しつぶくそのうなので、逆に俺の方から聞いてみるとこととした。

「話つて何かな？」

今まで視線を逸らしていた麻梨亜が俺の顔を見た。俺は二コリと笑つた。その顔に安心したのか、固かつた麻梨亜の表情が崩れる。

「あの……実は千尋のお部屋の話なんだけど……」

なぜ表情が硬かったのか、彼女の言葉で合点がいった。麻梨亞はあの部屋の秘密、そう、レイのことを俺に伝えようとしているのだ。わざわざ言いにくることを俺に教えようとしてくれる麻梨亞の優しい気持ちが嬉しかった。

「うん。 もう知ってるよ。 幽霊が出るんでしょう？」

俺の言葉に麻梨亞が驚きの表情を見せた。

「し、知つてたの？」

「うん。さつさつき理事長から聞いたの。でも大丈夫よ。私、その手のことに關しては鈍感だし、あまり気にしないから」

「で、でも夕食の時に、髪の長い女の子がどつねつ……」

「あ、あれ？ あれは私の勘違いよ。だつて部屋に戻つたら誰もいなかつたし、編入初日だったからきっと疲れていたんだわ」

「そつ……それならいいんだけど」

「それよりもありがとう。麻梨亞は私にそのことを伝えようとしてくれたんだよね。言いくらいことなのに話してくれて嬉しかったわ」

俺の言葉に安堵の色を浮かべる麻梨亞。よほど俺のことを心配してくれたに違いない。そんな麻梨亞の優しさに、胸のあたりがきゅんと疼いた。

「それじゃあ私、部屋に戻るね。まだ宿題が終わっていないんだ」

「うん。わざわざありがとう。それじゃあ、おやすみなさい」

「うん。おやすみなさい」

先ほどとは違い、晴れやかな顔でその場を立ち去る麻梨亞。きっと俺に伝えるべきかどうか悩んで宿題が手に着かなかつたに違いない

い。 麻梨亞は本当に良い子だと改めてそう思った。

ラウンジを後にし一階へと続く階段を上る。レイの正体を俺の方から言つてたら、さつと彼女は驚くに違ひない。少し驚かせてやううと思ひながら204号室の扉を開ける。

「ただいまー レイの正体、分かっちゃった~」

と、明るい口調で部屋に入る。すると部屋の真ん中あたりに座り、じちりをジッと睨んでいる鎧を着た落武者の姿があった。

13へと続く……

部屋の真ん中にいる落武者。鎧甲を身に纏い、はげ上がった頭のてっぺんが月明かりに照らされて光っていた。

両側に垂れた長い髪はボサボサで、寝起きのように広がっていた。顔は青白く、鼻の下にちょびではない髭が生えている。眼光は鋭く、ずっとこちらを睨んだままだった。

「ど、どう様ですか？」

じつと俺を睨む落武者に尋ねる。

「拙者、広小路^{定宗}と申すもので、」

（ひ、広小路？）

「その広小路さんが私の部屋にいた御用で？」

「IJの部屋に女と一緒に住む男が現れたと聞きつけ、駆けつけたので、」

「えつ、綾辻さんって男だつたんですか？」

部屋の隅にいたレイが驚く。暫く一緒に生活をして、そしてその後、何かの拍子でバレた時に説明するつもりだったのだが、速攻でバレてしまつた。

「だ、誰に聞いたんですか？ 男だつてことは……」

「それは拙者の口からひき出さよつと……」

「この落武者。名前からして麗菜に関係しているに違いない。あいつの脈はいつたいてこの世界まで繋がつているんだ？ 聞いてみたい氣もあるが、知つてしまつのが怖いので聞かないよつとしておこうと思つた。

「で、その瓜小路さんは」「一体何をするんですか？」

「何を決まりきつたことを……」「この女に卑猥なことをする」とが
あつたならば、お主を成敗しようつと」

「卑猥なことひて……レイは幽靈ですよ。ビツカツひせんなこと
するんですか？」

「触れずとも卑猥な」とせできぬであらへ。……例えば「んな事とか」
やつは「つと、落武者は下半身を露出して、部屋の隅にいたレイに向
部を晒した。

「わやああああああああああつー」

レイが顔を手で覆いながらその場にしゃがみ込む。

「お前が出したヒツリあるー。」

たまたま近くにあつたハリセンで落武者の頭を叩く。だがハリセンは弦を切つた。

「残念でした～！　お主に拙者は倒せん。だつて拙者は幽靈だもの」

『いかの詩人のような結びで答える落武者、広小路定宗。

（くへつー　なんかムカつく）

「武士がそんなことしてもいいのか？　武士が女の前でそんな格好をして恥ずかしくないのか？　武士道とはなんぞやつ～！」

ワザと武士の心を挑発する。武士ならば、この言葉にきつと反応するだらう。思つた通り、目の前でおちやらけていた広小路定宗の顔色が変わつた。定宗はその場に膝から崩れ落ちると、先ほどのふざけた口調とはうつてかわつた態度に出た。

「せ、拙者としたことが……あのような不埒な真似を……ぶ、武士として恥ずかしい事をしてしまつた。ここは武士らしく、責任をとらせて頂く」

そう言つと、定宗は短刀を抜き、それを目の前に置いた。

定宗は『いかから取り出した短冊を手に取ると、これまたどこから取り出した筆を使って辞世の句を書き始めた。書き終えて筆を置くと、その隣に短冊を置いた。俺はその短冊をちらりと見た。

『あわれなり　あいつに釣られて　出しちゃつた』

「では……」

そう言つと、定宗は月明かりでキラリと光る短刀を自分の方に向

すると、それを一気に自分の腹へと突き刺した。

唸り声を上げ、うすくまりながらお腹を押さえる定宗。短刀を突き刺したあたりに手をやつたあと、自分の手のひらを見てワナワナと震えだした。

「き、切れてない！」

俺の方に手のひらを向け、切れてないアピールをする。俺は近くにあつたハリセンで定宗の頭を叩いた。ハリセンは空を切つた。定宗は人差し指を立てて左右に振りながら、チツチツチツと舌を鳴らした。

「そんなの全然利かない……だつて幽霊だもの」

どこかの詩人のような結びで答える定宗。

(<`h`h`! ムカツク=!

あのう茶飴はれぐまのこで……

一茶番にて言へな！」

レトの言葉に徒然と回里にシタ二三を入れてし掛いた

「全く……麗菜め……余計な奴を呼びやがつて。やつぱー言文句を言つてやれ!」

俺は携帯を取り出すと、麗菜の番号に電話を掛けた。

トウル ガチャッ！

「出るの早っ！」

「私は広小路定宗などとこつ落武者など知らぬ！ ガチャ！ ツーツーツー！」

（まだ何も言つてないし……）

携帯から通話が切れた音が漏れ続ける。

麗菜は一体どこから情報を手に入れるのだろうか……。そんなことよりも……。

「出でいけよ。ここは俺たちの部屋なんだ」

【定宗】の部屋から出て行くよつと言つた。

「断る！ 若い男女が同じ部屋で生活するのは教育上よろしくない。拙者が出て行けば、お前は必ず彼女に対して卑猥な事をするはず。拙者、武士としてそれを見逃すワケには行かぬわ！」

「だから～ら～。幽霊相手にどうやって卑猥な事をするんだよ」

「触れずとも卑猥な事はできるであらへ。例えばこんな事とか……」

【定宗】がレイの前で局部を晒す。

「さああああああああああああつ！」

レイが悲鳴を上げ、俺がハリセンで定宗の頭を叩く。が、ハリセンが定宗の身体をすり抜ける。

「ふははははっ！ 無駄、無駄、無駄、無駄あああああっ！ だつて、
幽靈だもの」

「ふ、武士として恥ずかしくないのかあああ」

「まあ、そうだ。拙者は武士であつた。」

定宗が短冊に辞世の句をしたためる。

『「めんなさい あいつに釣られて また出しちゃうた』

では

そう言つと、定宗は月明かりでキラリと光る短刀を自分の方に向けると、それを一気に自分の腹へと突き刺した。

唸り声を上げ、うずくまりながらお腹を押さえる定宗。

定宗は短刀を突き刺したあたりに手をやつたあと、自分の手のひらを見てワナワナと震えだした。

きつとまた同じ事を繰り返すと思つたので放つて置いた。案の定、同じ台詞を繰り返している。呆れた俺は、ふと窓の外に視線を移した。すると、女子寮から出て行く加納麻梨亜の姿を見つけてしまつ

たのだ。

「麻梨亞さん、こんな時間にどうに行くんですかね？」

いつの間にかそばに来ていたレイが呟くように言った。女子寮を離れるにつれ、麻梨亞の姿が見えにくくなる。そしてついには、麻梨亞は闇の中へと姿を消していったのだった。

14へと続く……

（ね、眠れない……）

午後十時三十分を過ぎると、女子寮内の明かりが消された。編入初日。色々な事があつて身体はとても疲れている。さつさとベッドに入つて身体を休めよつと思つたのだが、とても休めるような状況ではなかつた。

レイは布団の上で仰向けになりながら、手を胸の上で組んで寝ている。ぴくりとも動かず眠つてゐる姿は、まさに天に召された姿そのものだつた。

それに引き替え、定宗は寝相が悪い。俺の上をブカブカと浮きながら、乱れた髪を俺の顔の上に垂らしている。口を開けながらビキをかく姿は、年頃の娘から『づれつ』と言われるオヤジの姿そのものだつた。開けた口から今にもヨダレが垂れそうで、おちおち寝ていられない。俺は布団から出ると、窓際に置いてあつた丸いイスに座り、月を見ていた。

そばには文体スーツ『北極三号』が吊つてある。もうレイには素性がバレてゐるので、眠るときにはスーツを脱ぐことにしたのだ。

（今日は満月だな……）

夜空に浮かぶまん丸な月を見ていた時だつた。女子寮を取り囲むように植えられたバラの生け垣のあたりで、何か黒い影が動いたよ

うな気がした。俺は身体の位置をずりし、皿を凝らしながら影が動いたあたりを見てみた。

(あつ…… 麻梨亞だ……)

そこには、先ほど女子寮から抜け出した麻梨亞の姿だった。彼女が女子寮を出てから一時間ほど経過している。麻梨亞は一時間もの間、外にいたことになるのだ。

(こそこそに長い時間、外で何をしていたんだろう。)

当然の疑問がわき起る。この女子寮はトメちゃんの厳重なる監視下にあるので、そう簡単には外に出ることはできないのだ。なので、麻梨亞は何か特別な用事があつて、許可をもらつた上で外に出ていつたと思われる。そう思つと何だか気が抜けた。俺は初日の疲れもあつて、その場でウトウトとし始めていつたのだった。

翌日……

「…………ぐだぐだ」

「千尋さん……ぐだぐだ」

遠くでレイの声が聞こえる。

(……ぐださい？ 千尋さん、ぐださい？)

半分眠った状況の中、俺は以前、こいつと盗み見た親父のエッチなビデオの内容を思い出していた。何度も言つよつだが、俺は女

性に触れられるのが怖いだけであつて、女性が嫌いなわけではない。当然、年頃の男としては、そういうたびにビデオにも興味があつたわけで……。確かそのビデオの中で……。

おはよう。」
「わが欲しさのなか?」

「ああん、欲しいです」

「欲しかつたらお願ひしてみろ。」

「ああん、ぐださー

「十勝河へ……、伏だ河へ……」

近くでレイの再びレイがそんな言葉を言った。

「…………… じょうがねえなあ。 そんなに欲しいなら」

少しの沈黙のあと……

レイの悲鳴で飛び起きた。『氣づくと俺は、朝の生理現象でとんでもないことになっているモノを、レイの田の前に晒しげもなく晒していた。』

パコオオオオオオン！

突然後頭部に衝撃が走る。振り向くと、ハリセンが宙に浮かんでいた。その後ろには定宗が呆れた顔で突っ立っていた。

「お、お前、モノが掴めるのか？」

「直接モノをつかむことはできん。じゃがモノを念力で操ることは可能じゃ。だつて幽靈だもの……」

「……」

俺が黙った事で、何度も言つたフレーズがもうウケない事に『氣づいたのか、定宗の頬がピクピクと痙攣していた。』

それよりも、お主はとんでもないことをしでかしたの。いたいけな女の前で、そんな卑猥なモノを晒しあつて！ 腹を切れ、腹を

「！」

そう言つと、定宗はどこから短刀を取り出し、俺の前に置くと、これまでどこから取り出した短冊と筆を俺に渡した。

俺は辞世の句を詠んだ。

『「めんなさい 梢と間違え 出しあやつた』

目の前の短刀を手に取り、キラリと朝日を浴びて光る刃を自分の方へと向けた時だった。

π, π, π, . . .

部屋のドアをノックする音が聞こえた。

— 千萬不起晚了？ — 繼[朝][飯] — [!]

エアの向にへから緑坂真緑の声がした

卷之三

ねえ まだ寝てるの?
入るわよお

($\vdash \neg \bar{p} \#$)

女体スリットはまた着てしない。俺は俺のままである。

「あつ、あ、起きてるわよ。ちよつと待つてねつ、今着替えると
いひだからあ

「 そ う な の ？ 」

何故か嬉しそうな声が外から聞こえる。

「じゃあ……入っちゃおうかな」

ドアノブに手をかけて、それを回す音がした。よく考えたら、昨

田ドアに鍵をかけるのを忘れていた。

「やばことよ、やばことよ、やばことよ、

とあるお笑い芸人のよつなダニ声であたふたする俺。

「早くこれを着ろー！」

定宗が念力で女体スーツを俺の方へと投げた。俺はそれをキャッチすると、慌ててスーツに袖を通した。

「お前ら、隠れろー！」

幽靈二人組は布団の中に隠れた。同時に部屋のドアが開いた。

「おはよー、千尋……あら……もう、千尋つたらー。着替えてるなんて嘘を言つてー。そんな格好して。もしかして誘つてる?」

視線を落とす。女体スーツに袖を通したばかりなのでまだ下着もつけていない。つまり全裸である。

「もう、しうがないなあー」

「ヤーヤしながら、真緒は後ろ手でドアを閉めた。

真緒が妖しい笑みを浮かべながらじりじり近づいてくる。しかも着ている制服のブラウスのボタンをひとつずつ外しながら。

(や、やばー)

俺は身の危険を感じた。だが、肝心な時に身体が動かない。触られるかもしないという恐怖から、身体が動かなくなってしまったのだ。そういうつまづき、真緒は俺の目の前に立っていた。

「……千尋の裸、すくく綺麗……」

俺の背中に手を回し、抱きつく真緒。女体スーツのおかげで直接触ることがないので、失神まではいかなかつた。だが、次の瞬間、真緒は目を閉じると、俺の顔に自分から顔を近づけてきた。真緒の吐息が唇に掛かる。

（やばい……もづだめだ……）

意識が飛びかけた時だつた。部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「綾辻さん、起きてる?」

（ん?）

何故か外から真緒の声がする。

「ちょっとお話をあるの。開けていいかしら?」

その声に真緒がビクつく。

「やばい……」

真緒が慌ててどこかに隠れようとすると、ドアが開く方が早かつた。

扉がゆっくりと開く。

今俺の横にいるはずの真緒が、何故か扉の向こうに立っていたの
だった……。

15-続く

扉の向こうに立っていたのは、真緒と同じ顔をした女の子だった。だが真緒は確かに俺の横に立っている……といふか、俺に抱きついている。

「真緒……あなたまた……」

扉の向こうにいる、真緒と同じ顔をした少女が顔をしかめながら真緒を見つめて言った。

「私、何もしてないも～ん。さあ、朝ご飯、朝ご飯」

そう言つと真緒は俺から離れ、何事もなかつたかのよつて部屋から出でていった。

「あ、あの～」

扉の前に立つ真緒に似た少女に恐る恐る声を掛ける。

「「めんなさい。妹が失礼なことをしたみたいで……とにかくそのままの格好ではまずいですわ。着替えが終わつたら呼んでください？」

彼女は裸の俺の頭の先からつま先までゆっくりと見た後、扉を閉めた。

「あのお方は真緒さんのお姉さんの真夜さんです。ちなみに双子ではありますよ」

布団に隠れていたレイが、彼女のこと教えてくれた。

「へえ～お姉さんなんだ。どうで似てると思つたよ」

制服に着替えながらレイと言葉を交わす。

「彼女は麗香女学院の生徒会長さんなんですよ」

「へえ～生徒会長… 頭は似ていても、真緒とはえらい違いなんだな……」

えらい違い＝真緒はちよつとアブナイ性癖の持ち主という意味で

「もういいですよ～」

制服に着替え終わった俺は扉の向こうにいる真夜に話しかけた。

「そう。分かったわ」

真夜が答えると、扉がゆっくりと開いた。すると、そこにはやつしきと感じの違う少女が立っていた。

明るい栗色の髪を後ろでまとめ、それを左肩から前に回して、いつの間にか赤い縁のメガネを掛けている。先ほどの印象とは違い、どこか真面目な感じがした。

「あの、お……いや、私に何か用ですか？」

生徒会長の真夜に尋ねる。

「別に大した用ではあつませんわ。私、昨日の夕食の時は席を外していいたので……それで今日あなたに挨拶をしに来ただけですわ。私、この麗香女子学院の生徒会長をしている、結城真夜と申します」

真夜はお腹のあたりに両手を添え、丁寧にお辞儀をしながら挨拶をした。

さすがはこの女子学院の生徒会長である。ひとつひとつ仕草にどこか気品が溢れている。理事長である麗菜とは『天と地』、『月と

すつぽん』、『ウ ンのちからと力』『のむかひ』などとの差がある。

「そ、それはびっくり……」

「ひらが恐縮してしまつほどぞ、真夜の仕草にはスキがなかつた。

「それでは朝食に参りましようか」

真夜がぐるりと身体をひるがえし、歩き始めた。

「え、ええ。やつこたしまじょ、

（やばい……言葉遣いがうつった……）

俺は真夜のあとをついて食堂へと向かつた。

朝食の時、食堂は昨日とは全く違つ雰囲気だつた。生徒会長の真夜がいるからだらうか、寮生たちもどいかお上品に朝食を食べていた。

(な、なんだか堅苦しいなあ……毎日こんな雰囲気で食事をするんだろうか……)

心なしか、昨日の夕食よりも味が薄いような気がする。食事はやっぱり楽しい雰囲気で食べる方が美味しいのだ。そう思つていたときだつた。

(真夜さんはとても忙しいので、一人で夕食を食べることが多いんです。なのであまり夕食時に顔を合わせることはありませんよ)

「えつ？」

頭の中でレイの声がハツキリと聞こえた。レイがここにいるはずはないのに……。

俺が不審に思つていると、

(うーんです。カーテンのところ)

(カーテン? どこだ?)

あたりを見渡す。食堂に光を取り入れる為の大きな窓のところに薄いグリーンのカーテンがある。その後ろに、なにやら人影を見つけた。

(やつやつ。そこです)

(ん? っていうか、何でレイと会話してるんだ?)

(私たちは直接相手の脳に話しかけることができないのです。だって幽靈だもの)

レイまでもがどこかの詩人のよつた結びで会話を終える。定宗の悪い影響だ。

(じゅあ誰にでも直接話しかけることができるのか?)

(それは無理なんです。誰にでも話しかけられるワケではないんです)

(や、やつなの? じゃ あ何で俺には直接話しかけられるんだい?)

(それは、千尋さんが選ばれた勇者だからなのです)

(や、勇者? 俺が選ばれた勇者なのか?)

(嘘でや……)

「嘘かよつー」

思わず声に出して、手を前に突き出しながらシラコバトを入れてしまつ。

「やあひー。」

二つの間にか隣に座っていた麻梨亞が驚いて声を上げた。

「じ、じひったの千尋、急に……」

「うー、ごめん。ちょ、ちょっと寝ぼけてただけ……。あ、それよりも麻梨丼、昨日の夜……」

(あああああああああああっ!)

レイが突然大きな声で直接頭に話しかける。

「うわあああああああつー！」

「ハセウノ」

その声に俺も思わず叫んでしまった。それに驚き麻梨亞が悲鳴を上げる。

「綾辻さん。食事中は静かに……」

真夜に注意されてしまふ。

(レイ……何だよ急に大きな声を出すなよ。怒られちゃつたじやないか)

（麻梨亜さんには昨日のことは言わない方がいいと思います。麻梨亜さん、何かとても大事なことを隠しているような気がするんです。誰にも言えないような何かを……）

(何でそう思ひの?)

（幽霊の勘です）

(...)

(……)

(当たるの？ その勘)

(以前私の勘に耳を傾けずにいた生徒がいました。その人はダンプに跳ねられた挙げ句、今では地獄の一丁目をさまよつて……)

(分かつた。言つとおりにしてよつ……)

「昨日の夜がどうかしたの？」

麻梨亜が不思議そうな顔で尋ねてくる。

「あ、えっと……昨日の夜はよく眠れた？」

「あ、うん。眠れたよ……どうしたの？ いきなりそんな事聞くなんて……」

「う、うう。編入初日だから、よく眠れたのかなあつて思つて」

俺が言つと、麻梨亜はふつと吹き出した。

「編入してきたのは千尋の方でしょ？」

白い歯を見せて笑う顔がとても可愛かつた。俺はまたフワフワとした変な気持ちになつた。

（驕られるでない！ そやつはお主が思つてこるよつな女ではない
かもしれぬぞ）

突然男の声が頭に響く。ふとカーテンの方に視線を向けると、レイの横には鎧をきた定宗の姿がある。あんなにも目立つ格好をしているのに、誰一人、奴に気づいている者はいない。どうやら定宗の姿は、他の人には見えていないようだった。

（どうこいつ意味だよ。俺が思つてこるよつな女じやないって）

（拙者は見たのじや……数日前、そやつが女学院を抜け出して中年男性と密会しておるところを……そやつはのむ、中年男の前でを おつたのじや……）

（えつ……そんなバカな……）

俺は、定宗が放つた言葉に絶句した。

16に続く

(何を驚いているのですか?)

定宗が放つた『中年男の前で を おつたのじや』と いつ言葉に絶句する俺。そんな俺にレイが尋ねた。

(だ、だつて……意味分かんないし……中年男の前でマルマルマル マルをマルマルマルおつたのじやって言われても……麻梨亞は一体 その中年男の前で何をしたんだい?)

俺はカーテンのところにいる定宗に向かってそう念じた。

(知りたいか?)

(うん、知りたい……昨日の夜、麻梨亞が出掛けたところを実際に 見たワケだし)

(どうしても知りたいか?)

(うん、どうしても知りたい!)

(そこまで言われば仕方あるまい。だがつまく説明できるかビックリ……)

(頑張つてみてよ)

(拙者なりの説明の仕方で良いか?)

(うん。何でもいいからとにかく説明して!)

(あい分かった。では……)

やうやうと、定宗は鎧甲を着た身体でリズムを取り始めた。

(あ、ワン、あ、ツー、あ、ワン、ツー、スリー、フォー！ 麻梨亞ちゃん、麻梨亞ちゃん、この前の夜の秘密はね、麻梨亞ちゃん、麻梨亞ちゃん、昨日の夜の秘密はね……)

何かイヤな予感がした。

(教えてあげないよ、ジャンって言つたら、部屋中に魔除けの札を貼つておくからなー)

[定宗]が[吉]の前に釘をさす。とたんに[定宗]は静かになつた。どうやら図星のようだつた。

(なんか～マジムカツク～大体、教えてほしいのにその態度つて何?)

ギヤルのような口調で定宗が答える。麻梨亞の秘密を知るためだ。[吉]は敢えて下手に出ておこうと思つた。秘密を知つた後に魔除けの札を貼ればいいのだ。

(こやつー、イヤやわ、最近の高校生ときたら、利用するだけ利用しておこう、あとはポイやなんて。こわつ！)

「定宗が大阪のおばちゃんのよつな口調で語り掛けてくる。そうだった。俺が思つてゐることは、定宗には云つてしまつたのだった。」
「こはひとつ、穩便に……。」

（俺が悪かつた。頼む。麻梨亞を助けてあげたいんだ。麻梨亞が夜に何をしているのか、教えてください）

俺はテーブルに両手をつき、深々と頭を下げる。

「千尋？ 何やつてゐの？」

隣にいた麻梨亞が不思議そつに尋ねてきた。

「え、えつと……ストレッヂ……」

「えつ？ 一人エッヂ？」

麻梨亞が聞き間違えてそう言つた……のならじょつとドキッとするのだが、その言葉を放つたのはやつぱり真緒だつた。とりあえず真緒を無視し、もう一度『ストレッヂ』とハッキリ言い直すと、麻梨亞は納得してくれたのだった。ふとカーテンのところに視線を移すと、定宗が「けけけ」と笑つてゐるのが見えた。なんかムカつくが、今は下手に出なればならない。俺は再び念じながら、深々と頭を下げる。

（そこまでされたならば仕方がない。ただ、気を悪くしたのは確かじや。全部は教えぬ。あとは自分で推理するのじや）

定宗が高慢な口調で言つた。だがここは我慢だ。

(実はのむ、麻梨亞は中年男性の前で『お いを て』おひた
のじや)

肝心な所を で伏せる定宗。気になるよひに字を伏せておくのは
なんとなく分かっていた。

(お いか……。多分『おひぱい』って思わせておいて、実は違
うつてパターンだな。となると、後ろの『 て』は、『見せて』
つてことになるな……。定宗は俺に、『 麻梨亞は中年男の前でおつ
ぱいを見せておひたのじや』と言わせて、『ふふふ、お主もエロよ
のお』って言わせたいんだらうな……はつ、しまつた！ 今のも定
宗に読まれてしまつた！)

慌てて定宗の方を見る。奴は鼻くそをほじりながら外を眺めてい
た。

(大丈夫ですよ、千尋さん。幽靈である私たちが念を送つて千尋さ
んの脳と繋がらなければ、千尋さんの思つていることを察知する事
はできませんから)

(やうなの?)

(はい)

どう見ても念を送つて俺と繋がつていいとは思えない定宗の姿を
見てホッとした。そう思つてみると、定宗が急にこちらを見た。

(どうじや？ 分かつたか？)

(え、えっと……)

(ほれほれ、言つてみる)

定宗の顔がニヤケている。これはきっと俺が先ほど考えた『お主も口よの』のパターンに違いない。でもそれにのっかり、奴の機嫌をとるにとて本当のことを言つかもしれない。そう思つた俺は、さつき思つてついたことを念じてみた。

(答へばズバリ、『麻梨亞は中年男性の前でおっぱいを見せておったのじや』だつ！)

俺が答えを言つと、定宗は口をあんぐりと大きく開けたまま動きを止めた。

えつ？ マジっすか？

隣にいた麻梨亞の胸の膨らみをチラリと見る。制服の下にある豊かな膨らみを想像すると、ゴクリと喉がなった。

17へ続く……

「嘘だ！ 嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ――――――」

部屋に戻ると思わず叫んでしまった。あの可憐な学級委員長の麻梨亞がおっさんの前でおっぱいを見せていたなんて絶対に信じたくないかった。

「嘘だと思つたら自分で調べてみればよから」

部屋の隅で、レイが点てたお茶を飲みながら、定宗がひとりとのよつな感じで言った。

「結構なお点前で……」

茶碗を元に戻す。

「お粗末さまでした……」

一人は向かって立ったままお互ひ頭を下げた。

「おいおい、悠長にお茶を飲んでいる場合じゃないだら。どうやって麻梨亞のことを調べるんだよ。俺の経験上、夜にこの寮を抜け出すのは至難のワザだぜ」

先日、理事長室にこくときかれて、トメさんにお止められたことが頭をよぎる。

「じゃあここから抜けで外に出ればいいんじゃないですか？」

レイが閉められたままの窓を通り抜け、外から話し掛けてくる。

「俺、人間だし。窓をすり抜けられないし、ここに階だし……」

俺の答えにレイは、「あ」つてこう表情をしたあと、窓をすり抜けこむらへと戻ってきた。

「でも麻梨亞はじつやつて寮を抜け出しているんだろう。定宗の言いう方だと、寮を抜け出したのは一度や一度じゃなきゃつだし」

「それこそ調べてみたら良からつ。外に出るわけではないのだから、造作もないことであるつ……あああつ……そこはヤバいでござる」

部屋の隅でレイが立つた をじ」「きながら、定宗が身悶える。定宗は下半身を露出したままだ。

「おこおこ、何やつてんだよ人の部屋で。パンツはけよ！」

レイが俺の話を無視して作業を続ける。

「結構なおでまえで……」

放心状態で定宗が言った。

「お粗末な でした……」

レイは丸めたティッシュを二人の間に置いた。

レイに事実を突きつけられた定宗はポカンと口を開けて固まっていた。

キーンコーンカーンコーン

女学院の門が開く時間を知らせるチャイムが鳴った。俺は学校に行く用意をすると、鞄を持って部屋の扉を開いた。

「とにかく、今日の夜から麻梨亞の様子を探つてみよう。とりあえず学校に行つてくるから

幽靈一人を部屋に残し、俺は女子寮のすぐ横にある女学院へ向かつて駆けだした。

授業中も麻梨亞のことが気になつて仕方がなかつた。どの授業に対しても真面目に取り組む麻梨亞。一生懸命にノートをとつている姿からは、中年男性におっぱいを晒しているというシーンが、とてもではないが想像できない。じつと彼女を見ていると、俺の視線を感じたのかこちらを振り返つた。目が合つた瞬間、麻梨亞は二コツと可愛い笑みを俺に見せてくれた。

（嘘だつ！　こんなに可愛い子がオッサンの前でおっぱいを晒すなんてつ！）

「綾辻さん……保健室に行く？」

気づくと俺は、頭を抱えながら激しく首を振つていた。

「い、いえ……大丈夫です」

担任の春日由里絵が俺を心配して声を掛けてきた。俺は彼女の申し出を丁寧に断つた。

国語の授業も上の空。俺は麻梨亞の方を見ながら、よからぬ想像をして悶々としていた。麻梨亞はオッサンに対してどうこう理由があつておっぱいを晒していたのだろうか……。

「ねえおじさま。私のおつぱい、綺麗?」

「まあまあ…… ひとつも…… 綺麗だよ…… まあまあ」

「本当？嬉しい」

「ちよ、ちよつとだけ……はあはあ……触つても……はあはあ……いいかな?」

「うん……ちよつとだなよ」

「うん。ちよ、ちよっとだけ……まあまあ……」

「ひせこにせんじやくめいせん」

勝手に想像が膨らみ、自爆した。

「あやあああつー。」

俺の声に驚き、クラスメートが一斉に「ひら」を見た。

「あ、綾辻さん……やっぱり保健室に行つた方が……」

再び由里絵が声を掛けてくる。これ以上奇行を繰り返せば友達を無くしてしまはうかも知れない。俺は由里絵の申し出を受け入れることにした。

教室を出てゆく俺の姿を心配そうな顔で見る麻梨恵。本当にこの子が……と思うと、胸のあたりがモヤモヤしてきた。俺は教室を出ると保健室へと向かった。

……保健室……

「そんなに気になるならやつぱり加納さんのことを探るしかないんじゃない？」 真相が分かればその胸のモヤモヤもスッキリするわ

俺は保健室で校医の水島先生に相談していた。様子のおかしい俺を見て、絶対に学院側には秘密にするから話してと言つてくれた。彼女は何故か信用できるという気がした。俺は今抱えている悩みを相談することにしたのだった。

「でも加納さんはどうやって夜間に女子寮を抜け出しているのかしら。外出するときは履歴が残るようになつていてるはずなのに……。夜間外出は特に厳しくチェックされるから、何度も外に出れば絶対に問題になるはずよ」

水島先生の話によれば、女子寮の入り口には厳重なセキュリティが施されており、外に出ると履歴が残るというのだ。

（じゃあこの間、俺が理事長室に行く時に外に出たのもバレていたということか……でも俺にはお咎めがなかつたぞ……あ、そうか。麗菜に用事があつて出かけたからか……ん？ そうだよ。アイツを利用すればいいじゃないか！ いとこである特権を利用しないと）

麗菜のところに電話をしようと思いケータイを手に取る。取ったと同時に電話が鳴った。サブ画面に麗菜の名前が浮かぶ。

（ちよびよかつた。向こうから掛かってきたぜ）

「もしもし、俺だけぞ」

「無理！ ガチャ……ツーツーツーツー」

（えつ？ どうしたこと？ アイツから掛けてきたんだぞ……仕方ない、こいつから掛けてやる）

トウルルル　トウルルルル　トウルルルル

ガチャ

「あつ、俺だけど……」

「だから無理だと言っているだろ。しつこい奴だ。親戚だからと言つてお前を特別扱いする訳にはいか。ピーー。」

(え？ 今の留守電メッセージ？ ビックリ！)

なんかよく分からぬが、麗菜はアテにできないうことだけは分かつた。どうやら自分で何とかするしかないようにつた。俺は保健室で本日の授業の終わりまでを過ごしたあと、皆より一足先に女子寮にもどつた。

18に続く……

女子寮で生活をしているほとんどの生徒が何らかのクラブに所属し、放課後はそれぞれのクラブ活動に忙しい。クラブに所属していない寮生でも、図書館に行つて宿題や予習復習をする者が多い。

加えて終業のチャイムと共に寮に戻ってきた俺。つまり今、女子寮の中にいるのは俺一人だということだ。ひつそりとした女子寮の玄関に響くのは、この寮の管理人であるトメさんが放つ、地響きのようないびきだけだった。居眠りをしているトメさんの前を静かに通り過ぎ、俺は自分の部屋の扉を開けた。

部屋の奥にある窓の前で、定宗が椅子に座り、恍惚の色を浮かべながら身悶えている。その前にはレイが両手を定宗の膝に置いた形でその場に座り、顔を前後にリズミカルに動かしている。ジユルジユルという何かを噛むような水音が静まり返った部屋の中に響きわたり、レイが顔を動かす度に、定宗は『あつ』や『ああつ』という吐息にも似た声を放つていた。

（「こいつら、誰も寮にいないことをいいことに… でも……ちよつと興味があるかも……」）

一人に気づかれないように息を殺しながら近づき、真横から一人の行為をそつと覗いた。

レイはヨダレをたっぷりと垂らしながらコクコクと居眠りをしている。床にヨダレが落ちそうになる瞬間にハツと気づき、それをジ

ユルジユルと啜つてゐる。再び「ククク」と船をはじめるとい、マダレの垂れる瞬間にまたジユルジユルとマダレを啜つた。

「寝てるのかよつー」

思わず「シッコ!!」を入れつつ、レイの前に座る定宗を見る。レイの頭の動きに合わせ、恍惚の色を浮かべながら「ああつ」や「おうつ」、と吐息を漏らす定宗。どうやら絶妙のタイミングで寝言を放つて、ようやくだつた。

「やせこじこわつー」

田の前で喘ぐ落武者の頭に向かつて踵を落とす。アンティフグ直伝（マーテルによる）の踵落としは落武者の体をすり抜け、座つていた椅子にヒットする。この一人が幽靈であることを、俺はすっかり忘れていた。ひとり痛みに身悶えていると、「ヤーヤと笑いながら」チラを見ている定宗の姿があつた。

（「こいつ……起きていやがつたな……）

十分後……

「膚めじやつー……これは膚めじやつー」

トメさんから借りてきた大型犬用の檻の中に定宗を閉じこめ、腹いせに悪霊退散のお札をベタベタと貼つてやつた。これで定宗は檻の外に出ることはできない。俺はレイと共に、麻梨亞尾行計画のアイデアを練つていて。

「とりあえずは麻梨亜さんをずっと監視していくにはなりませんね。そのあたりは私にお任せください。私、麻梨亜さんの部屋に忍び込んで彼女を見張つておきますので。そろそろ麻梨亜さんも学校から帰つてくるでしょうし、私、行きますね」

そう言つと、レイは部屋の扉も開けずに扉をすり抜けて廊下へと消えた。俺はレイが麻梨亞を見張つてくれている間、出された数学の宿題と格闘していた。

そして夕食時……

「ね、ねえ麻梨亞……大丈夫？ なんか顔色悪いよ」

麻梨亜の近くにいた友人たちが、いつもとは違う彼女の様子に心配して声を掛けている。そのうち麻梨亜の周りには人が集まり始めていた。

色白の麻梨亜の顔がどこか疲れているように見える。肩も沈み、どこか元気がなさげである。

「どうが悪いの？」

友人の一人が声を掛けた。

「う、ううん。大丈夫よ。何だか寮に戻ってきたときから身体が重くて……っていうかすげく肩が重たいの。それで何だか疲れてるだけだから……ありがと、心配してくれて」

「そ、そう……それならいいんだけど」

大丈夫だとは言っているが、麻梨亞は相当辛そうな顔をしていた。それもそのはずである。だつて麻梨亞の肩の上には、レイが幼い子供がパパに肩車をしてもらつているような格好で、麻梨亞の肩の上に乗つているのだから……。

(いくら何でも張り付きすぎだつて……でも、あれなら巻かれる心配もないし安心か)

麻梨亞のことをレイに任せ、俺は部屋で待機していた。檻の中に入れた定宗の恨み節を延々聞かされながら時間が過ぎてゆく。本日百三十一回田の『呪つてやる。呪い殺してやる』という言葉を聞かされていた時だつた。俺の頭に直接話しかける女の子の声があつた。

(千尋さん、動きました)

レイが何故か小声で話しかけてくる。直接話すわけではないのだから小声になる必要はないんじやないかと疑問に思いつつも、レイからの情報を元に、俺は作戦を決行することにした。

(今は女子寮の玄関にいます。あつ……いつやつて出れば誰にもバレずに外に出られるのですね)

レイが気になる独り言を放つた。

(千尋さん、私たち今、外に出ました!)

(ビ、ビつやつて外に出たんだい?)

(それは……来てみれば分かりますのでとりあえず管理人室まで来てください)

管理人室に何やら秘密があるようだつた。でも管理人室にはトメさんが常駐しているはずである。麻梨亜はいつたいどうやってトメさんの田を溢んで外にでることができたのだろうか……。

就寝時間を過ぎ、電気が消された女子寮の中を、俺は管理人室に向かつて抜き足差し足忍び足で向かつたのだった。

19へと続く……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1753x/>

ようこそ華の麗香女学院へ～俺を待つのは天国か地獄か
2011年10月29日20時58分発行